レポートNo.81

「本当にお腹から笑える日は必ず訪れます。」･･･レポートその1

花島美桜（３８才）

今 病気で泣いている皆さん 本当にお腹から笑える日は必ず訪れます。私が自分の身を持って証明します。長いお話を聞いて下さい。

●人間ドッグ

「ここ最近、疲れやすい。年とったのかしら？ でも、まだ３０歳なのに変よね？」こんな理由から、近くの病院で人間ドックを受ける様になりました。身体全体は特に異常なしという事でしたが初めての子宮頸癌検診でＤｒ，に「あれ？変だなぁ？もしかしたら、子宮後屈か子宮筋腫があるかもしれないから、婦人科へ行く様に」と言われました。私は、先生の「異常無し」の言葉を期待していたので頭を殴られたような衝撃を受けました。「ど～しよう」母には相談出来ないし・・・・。私の両親は昔の人間で「未婚女性が婦人科へ行くなんてふしだらな事だ」と言う考えの持ち主でした。

とりあえず、近くの婦人科へ行きました。またあの内診台に乗って嫌な思いをしエコーの検査や採血され「子宮筋腫です。普通の人の倍の大きさに膨らんでいる。すぐにこの薬を飲みなさい」私は、再び衝撃を受けました。ショックのあまり先生の話しをいい加減に聞いていると「君はこの薬を飲まない気がする。いいね！飲まなきゃ駄目だよ！」そして恐らくホルモン剤？と漢方薬？でしょうか？それを渡されて帰りました。「嘘だ～！ 私が何をしたの！」と自分の部屋で泣いていました。自分自身、特に自覚症状が有った訳ではなく普通に生活していたので、「あの婦人科医師の言う事なんか聞けるか！」と思いそのままほったらかしにしていました。

それから、三年後生理の時に痛みが出てきたのと塊が多くなった事からまた子宮癌検診に行きました。今度は別の年配の女性の先生で、最初の先生とは違って私の話を聞いてくれ、「この先生の言う事なら聞こう」と思いました。しかし？この先生の診察時間はあまりにも短く（週４日・午前中だけ）母に内緒で通うにはだんだん厳しい状況になってきました。おまけに１年振りにエコーで見た先生は、信じられない事に「大きいわねェ。採ったら楽よ。手術しなさいよ」と信じられない言葉を口にしました。

「先生、私まだ結婚もしていないんですよ。子供も産みたいです。」「無理よ！これは全摘以外に方法が無いわ」もう、この先生の所へは通えない。私はまた泣いていました。その後、癌検診で何ヶ所かの婦人科を訪れましたが何処へ行っても言われる事はおなじでした。

●摩周湖

先生に全摘と言われた頃、家庭内でも問題があり、毎日泣いて暮らす日々がありました。私の事を可愛がってくれた祖母に会いたい!と東京から北海道まで飛行機で行きました。丁度祖母の命日で御墓参りをした後に従弟に「何処へ行きたい？」と言われ「摩周湖がみたい」と言いました。

１１月末の摩周湖は湖の蒼さが一段と深く又、気温もマイナス気温な為に何とも神秘的で幻想的な魅力に包まれていました。このまま、この湖に沈めば楽になれる。あの柵を越えれば・・・・。「美桜ちゃん」と言う呼ぶ声で我に返りました。「祖母がまだ来ちゃ行けない」と言ってくれたのかもしれません。

●インターネット

アマチュアオーケストラに入っている私はオケの団内連絡の為にとパソコンを購入しました。真っ先に子宮筋腫と入れ広尾メディカルクリニックの事を知りました。「私の事を助けてくれるのはこの齋藤先生しかいない。でも、今はすぐに行けない。ギリギリまで待って最後の頼みの綱にしよう。」とＨＰのアドレスをお気に入りに残しました。結婚したらダンナ様に連れていってもらおう。その前に大出血したら、仕方が無い両親に全てを話そう。と心に決めました。

●最悪の症状

今までは身体が疲れた時には、絞られるような子宮の痛みを感じたり。２日目には出血が多くてトイレから出られない。２日目と３日目の夜はナイト用ナプキンにタンポンを併用でも３時間しか寝られない。尿意があるのにおしっこが出ない。出産だってきっと？こんなには痛くない筈。とか言う事は経験しました。それでも、自分自身で身体を疲れさせないように便秘しないようにとコントロールしてきました。

貧血の為に、９０分のバレエのレッスンも１時間も経たないうちにダウンしてしまい、自分自身、踊れない事に口惜しい思いもしました。（その時は貧血とは知らずに、太ったのかな？と思っていましたが・・・。）最後まで生理の２日目３日目は恐怖でした。

●生理が止まらない

今年の一月から風邪を引きずり、少し良くなったかと思うとまたぶり返すという事がありました。三月になってとうとう本格的に寝込んでしまい、その時に丁度、生理が始まってしまいました。既に薬づけになっている私の身体は抗生物質を飲んでも回復しません。

１０日程寝込んでしまったあとに、やっとこ起きあがれるようになりましたが・・・・。ところが、生理がまだ続いているのです。（１０日目のはずが、４日目ぐらいの出血量で）内科の先生に相談すると「すぐに婦人科へ行きなさい。嫌だと言っている場合ではないよ」といわれ仕方が無く又婦人科の門をくぐりました。

●レディスクリニックでの事

久しぶりに行く婦人科は又、緊張でした。「もう、観念して全てを受け入れよう」とまた内診台の上に上がりました。先生は「大きすぎてエコーが写らないです。内膜症とチョコレート膿胞もありますね」と言い。とにかくＭＲＩを撮りましょう。と言いました。帰りに止血剤やらビタミンＣ鉄剤に漢方薬風邪薬と持ちきれないくらいの量の薬を貰いました。

後日、保健センターにＭＲＩを撮りに行き、次の再診の時に「コピーを頂きたいのですが・・。」とお願いしたにも関わらず、先生はＭＲＩ診断書のコピーをくれました。「受付けで再度フィルムのコピーが欲しいのですが」と言うと「ここにはフィルムはありません」「？」なんと、先生はＭＲＩのフィルムを見ないで私の診断を下していたのです。それに、ダナン（ボンゾール）を４週間分渡され、この薬の副作用である血栓の事には何も触れませんでした。アメリカではこの薬による死亡者が出ているそうです。

●齋藤先生のメール

初診でレディースクリニックに行った日に駄目元で齋藤先生にメールを出しました。翌日に先生からのお返事を頂き嬉しくてすぐに予約のお電話を入れました。何処の誰だか？解からないこの私に、子宮温存の大切さと涙が出るほど嬉しい励ましの言葉が綴られていたのです。

●広尾メディカルクリニックでの事

病院へ行くと「ここは本当に病院？まるでペンションにでも来たみたい。」オルゴールの音楽の中、お花畑にいるみたいにソファでくつろいでしまいまいした。そのホッとしていた時に先生の言葉に私はガ～ンと衝撃を受けました。初対面の先生はとても怖かったです。

私の病状をお話される内容は、全て先生のおっしゃるとうりですし本当の事です。最近行った病院では、こちらの姿勢も身構えて行っていた為に何を言われても平気でした。（前は行く度に泣いていましたが・・・。）でも、ＭＲＩの画像を見ながら説明して下さる先生を見ていると、本当の事を言われながらも恐怖でした。

今回の手術も「友達と旅行で一週間程、家を空けるから」と嘘の理由まで考えていました。先生は「君の両親に内緒で手術するわけにはいかない。君の病気は治してあげるから両親を説得してきなさい。説明が必要ならば、ここへ連れてきなさい」と穏やかながらも厳しい口調でお話され、帰り道、私はまた泣いていました。

家に帰って、両親に「話しがあるの。聞いて。私、今日病院へ行って来た。」すると母は「子供が出来たの？」と全然見当違いの答えでした。全てを聞いた両親は「信じられない！そんな、インターネットで見つけた様な病

院は信じられない！国立病院へは行ったのか？そんな病院で手術させる訳にはいかない！ちゃんと他の病院で検査してもらえ！」と取り付く暇もありません。

「斎藤先生が広尾に来れば説明してくれる。」と話すと「電話してこれから直に行こう！」と父。しかし、「今日の診察はもう終りました。」と言われ仕方がなく、ゴールデン・ウィーク明けの予約を入れました。しかし、翌日両親は嫌がる私を国立医療センターへ連れていったのです。

●国立医療センター

一人で待合室で待っていると、大きなお腹を抱えた幸せそうな妊婦さんが沢山います。私は名前を呼ばれるまでの待ち時間に、昨日齋藤先生に頂いた『子宮をのこしたい１０人の選択』を夢中で読んでいました。順番が来て先生と話しをして、またあの内診台の上へ。「ちょこっと痛いですが我慢をして頑張って下さい。」いきなり子宮体癌の検査でした。ただでさえ苦痛なのにあんなに痛い思いをさせられるとは。

帰り道、両親の事を恨みました。その後、検査結果を聞きに行くのが嫌でしょうがありませんでしたが1ヶ月程して齋藤先生に「体部のガン検診の結果については一応お聞きになっておいては如何ですか。」とメールを頂き再び重い足を運びました。

今度の先生は、前回の先生とは違って特に厳しいＤｒ.でした。カルテの膣ＣＴ画像を見ながら「大きいねぇ！結婚は？子供は？いいですか？ここは手術を受ける人が沢山います。その中で普通は手術無しで治す様に進めるのですが、あなたの場合はすぐにでも手術です。迷っている暇はありません。ＭＲＩの予約が６月１８日です。この日をはずすと、２ヶ月先になります。そうすると大変なことになります。その年令では、まだまだ大きくなります。早く検査をして手術をしないと・・・・・。」ともの凄い迫力で全摘を促しました。

その時は既に広尾で手術待ちの状態でしたので曖昧な返答をする私が「とりあえず、又来ます」と言うと、「ここの病院じゃなくても良いから、すぐに検査をしなさい。他の病院へ行くのなら紹介状を書きますから・・・。」紹介状を書きながら「あなたのは子宮筋腫じゃない！巨大！子宮筋腫！です。良いですね！」とＤｒ.も一生懸命でした。

●両親と広尾メディカルクリニックへ<

連休明けに両親を連れて再び鶴見へ来ました。「こんな病院？」「こんな普通の家みたいなところで本当に手術出来るの？」と半ば驚いていました。私はすでに疲れ果てていたので、半べそ状態で齋藤先生に再会しました。

カルテを見て私の顔を見ると「君か？」と笑いかけてくれました。私は「私の話しじゃ信じられない。と言われ両親を連れてきました。説明をお願いします。」と言いました。齋藤先生に説明され、再び両親は驚いていましたが、今度は「自分の親なのに・・・何故話さないで一人で抱えていたのか？」と又不思議がっていました。「何故具合が悪い事を言わない！」と母に言われ私は「具合が悪くても『どうした？』とは聞いてもくれなかったじゃない！」言いながら、震えて泣いていました。

看護婦さんが直に肩を抱いてくれて「大丈夫ですか？」「ごめんなさい、先生失礼します。」眼に涙を一杯溜めながら私は隣の事務室の中でワンちゃんの頭を撫ぜていました。《私だって本当は聞いて欲しかったです。》今回の事も母に相談しない事を問われ「何故言わない？」としかられました。私にとっても「子宮筋腫」は自分の胸に収めるのにはあまりにも重すぎる病名でした。ずっと「何時話そうか？」と考え、その度に他のお嬢さんの事で「未婚女性が婦人科へ行くなんて・・・・。」とタイミングの悪い事ばかりが続きました。齋藤先生の丁寧な説明のお陰で帰り道「全てをおまかせしよう。良い先生に出会えて良かったね」と言われ私はやっと胸を撫で下ろしました。

Copyright(C)2001
HIROO MEDICAL CLINIC

レポートNo.81

「本当にお腹から笑える日は必ず訪れます。」・・・レポートその2

花島美桜（３８才）

●入院までの間

私の場合、ヘモグロビンの値が６～７と言う状態でしたので、本当なら1年後の予約のはずなのに、間に割り込ませて頂く為に電話で連絡待ちという事になりました。手術は7月の末に連絡を頂いて８月２７日手術と決まりました。初診の時に「術前輸血が必要になるかもしれない。」と言われ、「出来れば輸血は避けたいけど鉄剤は・・・・・。」と先生に言われました。それでも内科と国立医療センターで頂いた鉄剤を夜だけ飲んでいました。後は半乾燥プラムをおやつ代わりに、一日１０個ほどを何回かに分けて毎日食べていました。プラム効果のお陰か？何と術前検査では値が１４にまで上がっていました。

手術が終ってから看護婦さんに「あの～、輸血はしたんですか？」と聞いた所「大丈夫でした。」と聞かされ安心しました。しかし、鉄剤のせいか？毎回の生理の出血量は増えていたような気がします。今になってみては笑い話になりますが、私は手術までの1ヶ月間に「これで自分の人生に悔い無し。万が一？神様のもとへ行く様になっても良い。」と思い、思いっきり！好きな事をして好きなものを食べ入院前夜には遺書まで書きました。

●8月27日(月) 入院当日

一週間前ぐらいから些細な親子喧嘩で父と口をきかない状態が続いていましたが、朝「じゃ、行ってくる」と言うと「ああ」と返事が返ってきて私は家を出ました。母は心配顔で見送ってくれました。

広尾メディカルクリニックには約束の時間に１０分遅れで到着です。赤いリースの部屋に案内されて「これに着替えて下さい」と手術着を渡され着替えてから順に浣腸、悌毛、点滴をしてもらいました。先生が入ってこられて「君の番は２番目だからね。覚悟しときなさい」と笑いながら言って行かれました。

点滴をしながら「音楽を聴いても良いですか？」と言うとＣＤのリモコンを持ってきてくれて小鳥のさえずりのＣＤを聴いていました。お昼頃だった？でしょうか？「そろそろ行きましょうか」と看護婦さんが呼びに来てくれました。「緊張がほぐれた所為かお腹がすきました」と私が言うと、笑いながら看護婦さんは「もう、まな板の上の鯉になってください」と言われました。

●手術

初めて見る手術室は「明かる～い！普通の部屋みたい。でもあのライトはＴＶで見た事がある。わあ、器械が沢山ある。手術台って思った以上に小さい」と半分興味深々でした。手術台の上に上がると服を脱がされ、心電図や血圧計他の器械がつけられ鼻に酸素チューブもつけられました。

麻酔医の先生が来て、「背中を先生の方に向けて身体を丸めて下さい」と看護婦さんが私の身体を支えながら言い先生が背骨を強く押してました。「痛いけど我慢！」その内、背中に注射の針が入るのが解かりました。（これは硬膜外麻酔をする為の局部注射の針でした。）仙骨に注射された時は、思わず「いた～い！」と叫んでしまいました。消毒した綿花でお腹を拭きながら麻酔医の先生に「これは冷たいですか？」と聞かれ。「冷たくはないですが、触っているのは解かります」と私は言いました。

麻酔が完了すると今度は、尿導カテーテルが入れられ手術部位の消毒が始まりました。私は齋藤先生に「お願いします！」と言いましたが、声になっていません。消毒中の感じは、まるで正座で足がしびれている時に指で押されてジンジンした感覚がお腹にあります。その直後、有窓布を掛けられてあっという間にお腹から引っ張り出されるような感覚がありました。

そのまま麻酔で寝てしまったのか・・・、途中で麻酔の先生が私の顔を見ながら「痛いですか？」と聞いてきました。私は「痛いです。（本当は苦しいです。だったんですが）」「麻酔を追加します。」そして遊園地の空飛ぶジュータンに乗っている感覚で意識が遠のきました。再び「苦しい、もうやめて！」と言う思いで私は、足首をバタバタさせていました。「足を動かさないで！」と看護婦さんに足を抑えられ、今度は血圧計のついている腕の指から手を持ち上げようと動かしていました。すると、看護婦さんが来て私の手をず～と握ってくれていました。

麻酔の先生が「痛いですか？」と聞いて「いたいです！」と私。齋藤先生が「もう少しだから、頑張って！」と言われ声にならないうめき声と共に、苦しみの数分間でした。楽になったと思ったら術後処置がテキパキと進んでいて気が付いたら自分の病室のベットの上で寝ていました。（あの時、ず～っと手を握ってくれた方に本当に感謝です。あの手のお陰で私は心強い思いでした。）

後で聞いた話ですが、私の場合は強度近視の所為で眼圧が高く麻酔薬の中には緑内障の人がつかうと失明するかも？知れない薬があった為に普通の方が使う麻酔薬が使えなかったそうです。「麻酔の先生がとても苦労していたよ！」と後で齋藤先生に言われました。

●8月28日(火)

ほとんど、痛みのせいで眠れない夜が明けました。看護婦さんには本当に頭が下がります。夜中の間中体温と血圧と出血の処置に時間毎に来てくれ「大丈夫ですか？気持悪くはないですか？」と聞いてくれました。

朝、身体中に付いている器械を外して背中の麻酔のチューブを抜いてもらい。その後「さあ、歯磨きして下さい」と言われベッドを起してくれました。顔を拭かせてもらって。午後には身体の清拭をしてパジャマに着替えさせてくれました。「はい立って！歩いて２階の部屋に移りますよ！」内心「え～！」でも・・・・。

ゆっくりとですが起きて。立てる。歩ける。「嘘みたい！」階段下の診察室前まで行くと中で齋藤先生が笑っていました。「こんにちは」「先生はマジシャンです。嘘みたい！歩いています私」「嘘みたいでしょう！でも昨日だったんだよ！」と言われ「君はやせなさい！オペ前に血圧が高いのでビックリした。危険だったよ！」と言われました。

夕方に自力でトイレに行きましたが尿意があるのか？無いのか？解かりません。腹筋が使えないからチョロチョロ出ているだけでした。でも「トイレに行けたぁ！」と嬉しくなってしまいました。夕食にお茶とコンソメスープと乳酸ドリンク？でしょうか？「こんなに美味しいスープは初めて」と嬉し涙でした。

●8月29日 (水)

今日も又手術があると言う事で病院内はシーンとしています。オペ前に先生がいらして「どうですか？」ときかれて「大丈夫です」と答えてしまいました。看護婦さんには素直に「痛いです！」と言えるのに何故か？先生には退院まで「痛い」とは言えなかったんですね(笑）。

たまにストレッチャーの動く音と足音がします。私も寝ていても痛いだけなので、気分転換にソファのところへ行きました。そこには患者さんのお母様が心配顔でいらして。「大丈夫ですよ。私もこんなに元気に回復しています」と話すと少しホッとされた様子でした。

夕食に３分粥とおいもが出ました。ところが、傷の痛みが治まってきた所へ腸が動き始めてガスが溜まり、また苦しい一夜となりました。寝ても苦しい、起きていても苦しい。ナースコールをすると「これはガスとお通じが出ない事にはどうしようもない。この状態で下剤を飲んだらもっと苦しい思いをしますよ。」といわれ仕方が無く夜中の院内をうろうろしていました。その後、明け方にやっとお通じがあって、少し寝れました。

●8月30日 (木)

夜中に寝られなかったくせに、「ワンワン」と声を聞くとベットから起きている自分がいました。先生の愛犬パルちゃんの声です。点滴のスタンド押しながら私はパルちゃんと遊んでいました。午後にはお腹のチューブを外してもらい「この前ここに寝ていたのは４日前の事になるんですねェ！早いなぁ？」「そうだね。早いね」と先生。

そしてシャワーを浴びました。気持良かったぁ！シャワー室にあるナースコールのスイッチが釣りのルアーで出来ていて、間違って触ったら「どうしました？」と看護婦さんが聞いてきました。失敗！部屋に戻ると両親が心配顔で見舞いに来ていました。「元気になって良かった！先生にお礼を言いに行こう」と３人で下へ降りていきました。

先生は「術中大変だったのに、翌日は一番元気な顔をして立っている。君が一番問題児になると思ったのに違った？」と笑っていました。母が「どのくらい？切ったのですか？」と聞くと「スパッと８センチ切りました。」と先生。その話ぶりがおかしくて笑うと「そのその口！その口の大きさだよ！」とまた笑わせられました。最初のイメージとは大きく印象が変わって斎藤先生には最後まで笑わされっぱなしでした。

夕食前に先生から「これ、君の分」とファイルを渡されました。手術記念ファイルです。中を見ていたら、凄いのと専門的な言葉が解からなくて、思わず注射を打ちに来た看護婦さんに色々と聞いてしまいました。話し声が外まで聞こえたのか？齋藤先生が入ってこられそのままずーっとおしゃべりしていました。「続きは又明日話しましょうね」と言われて時計を見たら夜中の十二時前でした。先生ゴメンナサイ。

●8月31日(金)

入院してから、初めてぐっすりと寝られ目覚めは最高でした。朝顔を洗ってＴＶを見ていたら「朝食の用意が出来ましたよ」と呼ばれ２階のリビングに行きました。そこには、同じ日に手術した２人が居て、３人でおしゃべりしながら食事をしました。出てきた筋腫の事を話したり（私のは粘膜下筋腫・内膜ポリープ・チョコレート膿胞・筋腫と全部併せて１，０２０グラム。）２人に「多いですねェ！」と言われ「傷口は痛くない？」「腰は？」「食欲は？」と次から次まで話しはつきません。看護婦さんに「お話が弾んでいるところ申し訳ないですが、皆さんそろそろ点滴の時間ですが・・・。」と言われて「又、後で！」とそれぞれお部屋に帰りました。

自分でもこんなに元気になれるとは。本当にビックリです。「お昼御飯の時間ですよ。齋藤先生もご一緒です。」と呼ばれて又リビングに行きました。「にぎり寿司？良いんですか？食べて？」先生は「どうぞ！」「美味しい！」「そりゃ、そうでしょうよ。」と笑っていました。又先生のお話に笑わせられ「お腹がいた～い。笑わせないで下さいよ～！」でも先生は「笑って腹筋を鍛えて傷を早く治すんだよ」とまた笑わせます。

食事の後はティータイムです。水曜日に手術した３人も２階へ上がってきて一緒にお茶を飲みました。月曜日に手術した３人にはメロンとケーキまで出されて「ホントに食べて良いんですか？」「ホントに食べていいんですよ！」と看護婦さん（笑）「ワ～イ」と子供みたいにはしゃいでいました。外来診療でいらした初診の方や手術して月日の経った再診の方など、大勢の人たちでティータイムの楽しい時間はあっと言う間に過ぎていきました。

夕飯は、また３人で今度は和風ハンバーグを食べました。夕食後に下のお部屋を訪ねておしゃべりしていると、また齋藤先生がトントンと入ってこられ「こんな狭いところで話さないで上へ行こうよ！」と誘いに来ました。また５人でお喋りです。先生のお話を聞いているとあっという間に時間が過ぎます。時計はまた十二時近くになってしまいました。

●9月1日(土)退院

今日は家に帰れる！バンザーイ！朝から家に帰れる嬉しさと、ここを離れる寂しさとが複雑に入り混じっていました。朝食の後、手術室の準備を見ながら「ここで始まり、もう今日で終りなんだなぁ！」と何だか寂しさを感じました。かなり痛い思いもしましたが、楽しいことも沢山ありました。抜糸をしてもらい、先生に「カルテに貼るから。記念写真。笑って！」と写真を一人ずつ撮ってもらい、最後は先生と一緒に皆で撮りました。

帰りは、何と私だけ、先生の車で家まで送り届けて頂きました。最初に泣きながら広尾メディカルクリニックを訪ねた私は今、笑っています。これも、齋藤先生はじめ事務長さんナースのみなさんのお陰です。先生に命を救って頂いてあの手術を境に私自身が生まれ変わったような気がします。本当にお世話になりありがとうございました。

●退院後

翌週の月曜日から、仕事を再開しましたが本当ならまだ入院していてもおかしくない身体です。やはりお腹が痛くなってしまい２時間立ち仕事をすると３０分横になるという繰り返しでした。また入院中は点滴のお陰で元気でしたが、退院後は身体が疲れやすく、かえって病人に逆戻りをしたみたいでした。

傷口の消毒を自分でした時です。「こんなにきれいになっている。」まだ傷口は痛々しく見ていると、あのオペの様子が蘇ってきますがちゃんと肉の盛り上がりもなくきれいに縫合された跡がある。改めて齋藤先生の技術の凄さを感じました。

手術から１４日目に自分の所属するアマチュアオーケストラの定期演奏会があり「弦楽器だから大丈夫だろう？」と考えていた私は甘かったです。何とか本番は弾く事が出来ましたが、それまでの間は随分と仲間に助けてもらいました。普通に椅子に座っているという事がこんなに大変な事とは・・・・。（腹筋が完全に使えないから、無意識に背筋や他の筋肉を使い、おまけにホールの冷気に当たってまた痛みとの戦いでした。)何かあると、すぐに広尾へ電話してその度に優しく応対してくれたみなさん。本当にどうもありがとうございました。

この長い文章を読んでくださった方ありがとうございました。私の様に辛く悲しい思いをしている方に「決して諦めないで下さい！必ずお腹から笑える日は来ます。」とメッセージを送りたいです。

術前(pre-ope)のＭＲＩ	術後(post-ope)のＭＲＩ

摘出物	
	粘膜下筋腫

	術 前 (pre ope)	術 後(post ope)
赤血球(RBC)	488	547
血色素 (Hb)(g/dl)	10.5	15.2
ヘマトクリット(Ht)	36.5	46
CA-125	72.4	24
備考	●摘出物：1020g ●筋腫：954g ●内膜ポリープ：12g ●粘膜下筋腫：51g	

Copyright(C)2001
HIROO MEDICAL CLINIC

レポートNo.82

「諦めないで。納得できる治療をとことん探してください。」

伊藤真理子（４２才）

●真理子さんのお母様より

斎藤先生とスタッフの皆様には、本当にお世話になりました。娘が手術を終えて回復し、健康な体を取り戻すとともに、私の心まで安らかに、穏やかになっていったようです。本当はお会いしてお礼を申し上げたいところなのですが、なかなか関東まで出向く機会もございませんので、この場をお借りして、感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

娘が元気になってからというもの、周囲の方々が「お顔（の表情）が明るくなりましたね。」と、私におっしゃいます。自分では気付いておりませんでしたが、娘の体調が思わしくない期間は、知らず知らずのうちに私も暗い顔をしていたのでしょう。娘だけでなく私の心まで救っていただけて、本当に心から感謝しております。

●初潮からあった生理痛

私は「広尾メディカルクリニック」で治療するまで、“痛くない生理”というのを知りませんでした。初潮の頃から痛みがひどく、学生時代バス通学でしたが、通学中に痛みのあまりバスの中で具合が悪くなり、どうしようも無くなった事もしばしばありました。出血も少なくはなかったと思います。成長につれ、子宮や卵巣が成熟すると生理痛が治まる場合もあると聞きますが、私の場合は全くそんなことは無く、何か異常があるのでは？と婦人科に行ってみました。

地元では、総合病院に２件ほどかかりました。最初の診断は「子宮後屈」。そのため痛みが激しいのだと説明されました。治療法は特に無く、痛くなったら痛み止めを服用する程度です。その後、不正出血・排卵痛と出血など、思わしくない状態が続くし、生理痛や出血過多も悪化していくようです。

２件目の総合病院は、婦人科で有名な病院で、紹介され受診いたしました。その診断は「子宮内膜症」。すでにチョコレート嚢腫などもあったようで、スプレキュアによるホルモン療法を勧められ、２週間に１回、スプレキュアをもらいに通院しました。ホルモン療法は、顔面や首筋からのいきなりの発汗や軽い頭痛などの軽い副作用がありましたが、嚢腫は小さくなっていて、効果があったように思われました。

ホルモン療法を続けながら経過観察のため診察も受けますが、その過程で筋腫が発見されました。５㎝くらいの筋腫でした。ホルモン療法中は小さくなりますが、休止期間に入ると元に戻り、更に大きく成長するかのようでした。

その間２～３年はあったでしょうか。なんとなく言われてはいましたが、その後たまたま薬をもらいに行ったとき、男性の医師に診察され、この時点で摘出しか治療法はなかったのでしょうが、彼からは「これはもう、ダメだよ、キミ。」と言われてしまいました。全摘出をしろとほのめかしているのです。ですが以前から診察を受けている女医さんが、「そうは言っても、本人が納得できないと取れないよね。症状がガマンできるようだったらおいときましょう。」と言ってくれて、さらに３年くらい、ホルモン療法と鎮痛剤でごまかしながら、生活していました。

市販の鎮痛剤が全然効かなくなったのは随分前からで、まれに効くときもありましたが、効果が無い時は、服用して２時間３時間経っても痛みが治まらず、部屋中をぐるぐる・ゴロゴロとのたうちまわって、痛みを紛らわせながら過ごします。効能書にある服用間隔時間が経つと次の薬を、鎮痛効果が無いのに服用していました。効かなくても飲まずには居られないのです。

結局病院から鎮痛剤も処方してもらうようになり、おそらくポルタレンをいただいていました。１回に２週間分いただくのですが、生理２～３回で使い切るので、無くなったらまた貰いに行きます。この薬で胃が荒れないように、胃薬もいっしょに頂いていたと思います。

●筋腫の成長と症状

そして民間療法筋腫はいくつもあり、しかもできている場所が悪いようでした。大きいのがボンとあって小さいのがチョコチョコある感じ。最初、筋腫が５㎝程度だった頃は、生理が終わるとお腹がひっこんでいましたが、だんだん10㎝くらいに成長すると、常にお腹に圧迫感を感じて苦しくなってきました。

生理になると子宮が腫れるのか、胃が下から押されている感じがします。生理になるとお腹が張ってスカートがはけません。ウエストが止まらなくなるのです。主に左側が腫れていました。仰向けに寝ると、お腹の左側がポコンと盛り上がっているのです。寝ていてこの状態ですから、起きた状態だとかなりポッコリとお腹が出ていました。仰向けで寝るより左側を上にして寝ると楽で、逆に左側を下に向けると何か圧迫されて辛く、うつ伏せなどは全然できません。

生理はダラダラと続き、不正出血と生理は出血量で区別しているような状態でした。生理の出血はハンパじゃなく、初日・２日目がやたら多く、恥ずかしい話ですが、仕事で忙しいときなどついついトイレにも行けず・・・もうビックリなんて事もよくありました。

タンポンとナイト用のナプキンの併用で１時間持ちません。夜間、たまに薬が効いて熟睡してしまうと、朝ビックリするくらいのことになっています。何で気付かなかったんだろう・・というくらいの惨状。ビニールシート、タオルを敷いての完全装備（？）で寝ていました。

泊りがけの旅行などは、生理中だと同行者に迷惑が掛かることが分かっていますので、タイミングが悪い場合は、断れるものは断っていました。バス旅行などは手軽でよいのですが、自分の都合でトイレにいけない旅行は生理中には絶対ムリ。生理中は怖くて、旅行や外出もままなりませんでした。

子宮内膜症と診断されてからという物、婦人科の疾患に効果があるという民間療法や健康食品は、試せるだけ試してみました。漢方、健康食品、ハーブなどなど・・。

クロレラ

体質改善をするというので。粒とドリンク。牛乳を禁じられた。半年ごとに購入。けっこう高額。

漢方

某大手会社の漢方薬。

サフラン

血をきれいにする効果があると言われて。

これらのために、いったいいくらつぎ込んだか見当もつきません。今振り返ると、私にはどれもイマイチの効果でしたが、当時から子宮を残すために必死でした。

●斉藤先生との出会い

私の担当している仕事にもいよいよパソコンが不可欠となり、苦手とも言っておられず、自宅でも勉強しなくてはと、思いきってパソコンを購入しました。ついでだからネット環境も。そのとき、インターネットなら、婦人科疾患を治療するとびっきりの情報があるかも知れないと考え、検索を始めました。「広尾メディカルクリニック」を見つけてお問い合わせのメールしたのが平成１２年６月。仕事の関係もあったので、初診はお盆頃でした。

滋賀県にある、塞栓療法を行っている病院も見つけており、試そうと考えた時期もありました。ですが、知合いの医師にも相談してみましたが、「ちょっとね・・。」というイマイチな反応です。サイトに症例が少なすぎるのも不安だったので、結局は行きませんでした。

継続して、大きい総合病院の婦人科の医師に診て貰ってはいました。いわゆる「名医」といわれる先生です。でも普通の技術では子宮を残して治療できない事はすでに診断で言われておりましたので、その病院にも広尾ＭＣに行くことは別に話していませんでした。母の知合いから別の医者にも相談し、ＭＲＩ検査もしましたが、診断は同じでした。何とか説得しようという感じを受けました。広尾ＭＣに行くことは決めていましたので、ＭＲＩは看護婦さんにお願いしてコピーを貰い、初診の時に持参しました。

斎藤先生でも私の子宮は「ダメ」かもしれないと覚悟を決めて、診察に行きました。この素晴らしい技術を持った先生にも「キミのはちょっと難しいね。」と言われてしまうかも知れない・・。そんな思いはアッサリと裏切られ、「大丈夫だよ、もっとひどい人もいるよ。」と一言。思わずボロボロ泣いてしまった私。先生に「泣く事無いよ。」と言われたのを覚えています。

私の母は、最初、ネットで見つけた病院なんて！と大反対。「そんなのは信用できない。」と、どうしても診察について行くと言って聞きませんでした。そんな母も先生とお話をして、納得してくれました。『インターネットで見つけたもの』には、どうしてもうさんくささがまとわりつきます。しかも広尾ＭＣは自由診療で、保険が利きません。それには様々な事情があるのですが、そんなことは一般の人には分かりません。

友人にも「そんなの大丈夫？」と言われてしまいました。手術を受けるのは私なので、私や肉親である母が納得してくれていれば良いのですが、やはり「怪しい」と思われたままでは気分が良くありません。周囲を説得するために先生の著書を探したのですが、どこにもありません。出版社にも問い合わせましたがダメでした。診察の時に先生に相談したら「もう図書館にしか無いよ。」とのことで、先生のお手元に有った著書を頂くことができました。

初診の時はすぐに手術できると考えていたので、「暮れの前に手術してもらって、年内一杯休んで年明けから復帰かな・・。」などと考えていましたが、現実はそうそう甘くありませんでした。「年内の手術は無理。来年３月に入ってからになりますよ。」と言われ愕然。それでもここで治療しようと決めたので、即、予約して帰りました。

●術前の承諾書

自分で、自分のこの状況を重く考えたくなかったので、こんな思いもあと何回、などとなるべく軽く考えるようにしていましたが、いよいよ手術を迎えようという時、術前の承諾書に「万が一の場合は・・」という一文があるのを見つけ、ドキッとしました。開腹して見たらダメだった・・という状況が自分の身の上に起こらないとは限らないのです。このとき初めて、大きい手術をするのだ・・と実感しました。

先生はサラリと「大丈夫」とおっしゃるし、キズも小さいと説明されました。そう言えば、私が前にかかっていた病院での全摘出手術は、お腹を十字に切る上に、体へのダメージが大きいので１ヶ月入院で２ヶ月休養するようにと言われていました。それに替わる大手術を受けるのだ・・という思いがヒシヒシと押し寄せるのでした。

会社の上司（年下の男性）に、手術のため会社を休むことを申し出た際に、横浜まで手術に行くことに対して「なんでそこまでしなくちゃならないの？」という反応でした。説明は聞いたけど理解はしていないのでしょう。男性は、ご自分の奥様や娘さんがこういう病気にならないと、理解できないのかもしれません。

●術後の回復

心配だった腰椎麻酔もすぐに効いて、目覚めたのは手術も終わり頃だった気がします。その事に気づいた看護婦さんが手を握ってくれたのを覚えています。手術は順調だったようですが、術後の傷熱はなかなか辛いものがありました。２日目の歩き始めは、気持ちが悪くなってすぐにベッドに戻ってしまいました。

私の初診日が木曜日で、患者さんの昼食は大きな丼のウドンでした。「もうあんなに食べられるんだ！すごい！」とビックリしたことを思い出し、自分も４日目に入り、体調もずいぶん良くなったような気がして、頑張って食べたのですが、夜に具合が悪くなってしまいました。人は人、自分は自分。無理をしてはいけないと実感。それにしても、ホームページで見た体験談のように、スルスルとは良くなっていかないのが多少不安ではありました。

退院後、自宅で３週間休養しました。同期入院の人と連絡を取り合い、お互いの様子や回復具合を報告しあう日々でした。その休養期間も終わり、いよいよ会社に復帰しましたが、出勤２日目にどうにも体調が悪く、結局２～３日休んでしまいました。これは結構、体がツラかった。

その後はどんどん回復して２ヶ月を過ぎる頃には普通の生活ができるようになっていましたが、回復にも個人差があるのだな、と実感。最初は胃腸の動きが悪くて、食事に１時間くらいかかっていましたが、今はもうスッカリ大丈夫。急いでいる時などは、１０分くらいでお弁当を食べてしまう事も・・・。

仰向けになったらお腹がへっこみ、巨大な筋腫が無くなったのだと実感しました。今の生理は２７～２８日周期で、正常な生理ってこんなんだったの？？というくらい少ない出血。鎮痛剤も術後１度も飲んでいません。仕事の都合上、長時間トイレに行けなさそうな場合だけタンポンを使っていますが、それ以外は全然使いません。ダラダラとした出血やヘンなオリモノが無くなりました。

術前は、出血の無いオリモノは生理周期のほんの３～４日程度。生理後少量の出血が続き、中間辺りで排卵のため腹痛と出血。生理のような出血が１日あり、またその後も、出血ともオリモノともつかない出血が続き、本当に出血が止まるのは生理直前３～４日だけでした。それがすっかり解消されて生理もピタっと終わります。なんて快適なんでしょう！！

お世話になった地元病院に「こういう風に治しました。」と報告したい、と斎藤先生に相談したら、冗談交じりに「おいおい、ケンカするなよ～。」と言われました。確かに失礼な感じもするかもしれませんが、摘出しか無いと言われていた私の子宮が治癒した事実として、斎藤先生の技術の生き証人として、自分の受けた治療を見て欲しいと思ったのです。

●医療界の不思議

長年婦人科にかかって病院もいくつか変えてみて気付きましたが、医療の世界はカスタマー（顧客）サービスが欠落していると実感しました。来る者は拒まず・去る者は追わず。しかし普通の商売だったら、カスタマーサービスが無いと大変なことになります。来る者は良いですが、去った者には去った理由があるはずです。それをなぜ知ろうとしないのか？

普通の企業だと、ＣＳが充実していなければ間違いなく会社の業績は傾くでしょう。医療の世界にはそれがありません。医療だけはＣＳが無くても、顧客（患者）は誰も文句を言わない。普通の医者は患者が来なくなっても気にしない。忙しくて気にしているヒマは無いのかもしれません。

しかし、患者のデータ開示やその他、広尾で行っている当然のことができていない、現在の医療はおかしいと強く感じます。患者のデータは病院の物でも医師の物でもない、患者がお金を払って手に入れた「患者の物」なのですから。

また、「子宮を摘出しなければ生死にかかわる！」という病気ならばそんな事も言ってられないのですが、婦人科系疾患の多くは早期発見であれば治癒する率はかなり高くなります。それなのに全摘出なんて絶対にイヤ、取りたくない、と思うのは当然です。摘出してしまった後の後遺症を考えたことがありますか？

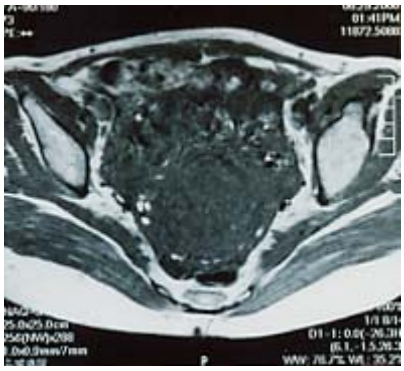
私の祖母は筋腫で子宮を全摘した後、腎臓の余病で亡くなりました。筋腫を摘出したことが原因かどうかは分かりませんが、全く無関係とは言えないと思います。また、体には不要なものなどありません（これは斉藤先生もおっしゃていますが・・。）ましてや子宮は女性には必要不可欠なもの。もし摘出されてしまったら精神的な支えをも失うでしょう。

摘出後に起こるかもしれない更年期障害も恐ろしい。全摘出してしまって更年期障害が起こらないわけが無いと思います。自分に起こる症状が軽いか重いかは、誰にも分からないのです・・。

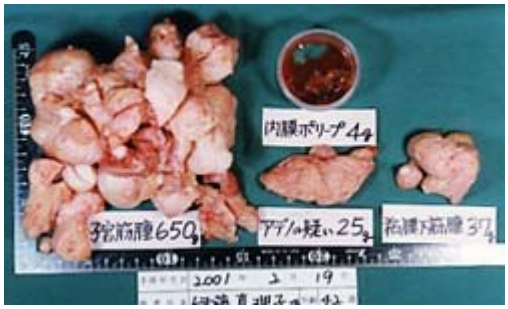
地元の病院で、あの女医の先生がいてくれて本当に良かったと思います。男性の医師に、診察のたびに「摘出摘出」と言われ続けていたら、だんだん暗示にかかりその気になって、摘出してしまったかもしれません。私は、女医さんの「本人が納得しないとね・・」という言葉に支えられて、広尾ＭＣまで辿り着けたのだと思います。

ここの病院でも、保健医療の範囲ではできるだけのことをしていただけたと思いますが、私達はそれ以上の治療を求めて、広尾ＭＣで手術を受けました。かかりつけの先生がいい人だろうが、「名医」だろうが、自分の納得いかないことは受け入れてはダメだと思います。見極めは難しいかもしれませんが、あきらめずに納得できる治療をとことん探して欲しいと思います。

体験談をご覧の方はせっかくここまで辿り着けているのですから、ご自分が本当に望む治療は何なのかよく考えて、ご自分にとって最良の治療法を選択して欲しいと思います。

術前(pre-ope)のＭＲＩ	術後(post-ope)のＭＲＩ
	

摘出物



	術 前 (pre ope)	術 後(post ope)
赤血球(RBC)	462	470
血色素 (Hb)(g/dl)	14.1	14.1
ヘマトクリット(Ht)	40.6	43.3
CA-125	49	-
備考	●術後　Hb10	

Copyright(C)2001
HIROO MEDICAL CLINIC

レポートNo.83

「私の妊娠を祝福してくれた最初のお医者様は、斎藤先生でした。」

Ｋ．Ｔ．（２９才）

●妊娠１６週目での手術

私は、２００１年５月、妊娠１６週目で斎藤先生の手術を受けました。妊娠の検査で筋腫があると分かり、斎藤先生に手術してもらうまで、今思うとあっと言う間の出来事でしたが、他の病院にかかりながら広尾メディカルクリニックを見つける迄の期間は、長く辛く感じました。２００１年８月現在、斎藤先生に救っていただいた子宮の中で、私の子供はスクスクと成長しています。

●妊娠はうれしかったものの‥

結婚したのは９９年の１１月。そろそろ子供が欲しいと思い始めた結婚２年目、２００１年２月中旬、主人と南の島に遊びに行った帰りのことでした。税関の人に「お腹の中に赤ちゃんがいるの？」と聞かれ、ただお腹にお肉がついているだけなのに・・・なんて失礼な！と怒った記憶があります。

でも、実際はその時すでに妊娠もしていたし、それによって、筋腫が段々と大きくなり始めた時期だったようなので、税関の人の言うことは当たっていたのでした。

でも妊娠しているとは全く気づかず、持っている洋服のウエストが全部きつくなり、会社の制服のワンピースでさえもきつくなって、なんでお腹だけこんなに出ちゃったの？と不思議に思ってました。

仕事柄（エステティシャンでした。）お腹を引き締めるジェルなどスリミング化粧品を色々と持っていたので、毎日のようにお腹に塗って運動もして・・、と頑張っていたのですが、ますますお腹は膨らむばかりで引込みません。半月頑張って３月上旬に、やっと妊娠したのではないか、と思い当たりました。

それからは、毎日のように色々な種類のテスターを買ってきては、試していました。（もちろん、全て陽性）でも、主人は、喜んではいるものの、「まだわからない、まだわからない・・」と信じてはいませんでした。

私はと言うと、とにかく嬉しくて嬉しくて。仕事も落ち着いてきて、そろそろ子供を・・と思っていた時だったので、本当に嬉しうれしかったのです。親にとっても初めての内孫だったので、とにかく、家中みんなで喜んでいました。（彼にはお婿さんに来てもらいました。）

出産は絶対にココで！と決めていた病院がありました。近所で無痛分娩で女医さんで、という病院です。早速妊娠検査に行き、内診をしてもらいました。診察後、女医さんから「おめでとうございます、◯週目ですよ！」という言葉が聞けると思っていたのに、実際に聞いた言葉は予想を裏切るものでした。「子宮の中に妊娠は確認できましたが、この週数にしては小さすぎるので、このまま妊娠が継続されるかどうかはわかりません。また来週きて下さい」と。

こんなにお腹が出てるのに、小さすぎるハズがない！なんで？という気持ちでしたが、その女医さんの言葉通り、１週間待ってみました。その間、徐々につわりが始まり、『つわりもこんなにあるんだから赤ちゃんは大丈夫！』と思い込むようになった矢先、すごい腹痛が起こりました。とにかく左下腹部が痛くて痛くて動けない状態。まだ３月で寒い日だったのに痛みで全身汗びっちょりです。こんな状態が１時間近くも続きました。コレは本当にマズいかも・・・と思い、痛みが和らいだ後、病院へ。

内診の時に女医さんからは又もや「やっぱり小さいねぇ。」と言われました。更に腹部エコーで診たらカーテン越しに「何かしらコレ？」と。それから数分エコーを診て「筋腫だわ。」私の母は４０代半ばで筋腫の手術をし、子宮を全摘しています。なので、筋腫という言葉は知っていましたが、「中年過ぎたオバさんがなる病気」という認識しか無かったので、『なんで２０代の私が？！』という気持ちでした。

診察後、その女医さんは丁寧に図をかいて説明してくれました。「今ちょうど５㎝くらいの筋腫ができてるけど、これ以上大きくなることはないので出産は不可能ではないから。ただ大きい病院の方がいいから紹介状を書きますね。」家に帰ってからインターネットで「筋腫」という言葉で検索し、色々なサイトを見ましたが、どれ

も「良性の腫瘍」「そのほとんどが出産も可能」と書いてあったので、なーんだ、大丈夫だ！と気楽に考えていました。（その時点では、広尾のサイトはまだ見ていません。）

●私の「大学病院信仰」が崩れたとき

早速次の日、紹介状を持って杏林大学病院へ行きました。こんなに大きな病院は初めてだったので、建物を見ただけで『コレなら赤ちゃんも助かるわ！』と洗脳されてました。その日は若い女医さんで、「最初なので色々検査をしましょう。癌の検査も一応しておきましょうね。」と言われたのですが、その一言で私の頭の中はパニック状態に陥りました。

筋腫＝良性のハズ。何で癌の検査？私は癌なの？？私はどーなっちゃうの？？？とめまぐるしく考えていたら、女医さんが私の気持に気づいたらしく、「ほら、向井さんの例もあるし！」と明るく言ってくれましたが、その言葉で更に動揺し、向井さん＝向井千秋さん（宇宙飛行士の）と勘違いした私は、なに！向井千秋さんは癌だったの？死んじゃったんだっけ？？？と更にパニックになり、ワケの分からない大変な状態でした。女医さんが「向井亜紀さんのね。」と言ってくれたお陰で、やっと落ちつき、検査を受けることができました。

癌の心配は無し。その日は「筋腫は約６㎝」と診断。毎週来るように言われました。私は『こんな大きくて近代的な病院で毎週診てもらえるなんて、なんて幸せなんだろう。これで安心！！！』とその時は思い込んでいました。その時の私は、大学病院というトコロは医学の最高峰であると信じきっていたので、もう安心、と気楽に考えていました。

しかし、毎週行くたびに医師が変り、毎回同じことを言われ、段々うんざりし始めました。毎回言われる言葉は「筋腫が大きいねぇ、今日は◯㎝だよ。赤ちゃんは小さいんだよねぇ～。このままでいくと、筋腫が中から腐ってくるから、そしたら入院をして、様子をみていくからね。」

実は私の筋腫は１週間に１㎝ずつ大きくなっていたのです。インターネットで調べた知識では、〝筋腫は半年で１㎝～３㎝ずつ大きくなる〟とあったように思います。なのに私の場合、異常すぎるのでは？と思うくらい急成長し、医師の言葉にも『なんで入院の前に治療がないの？腐るまで待つしか無いの？』と段々不安を感じ始めました。その間にもお腹はどんどん大きくなっていきましたが、この中身は赤ちゃんじゃなくて筋腫なんだ・・・と思うと考えるだけで、涙がこぼれてきました。

毎週行っていた病院でも、待合室でいつも泣いていました。産婦人科は婦人科受診の方が多く、年輩の方も沢山いたので、あまり気にはならなかったのですが、隣が小児科で、いつも私の前を子供たちが走り回ってる姿を見て、『私は産めないかも知れないのに・・・親は何をやってるの！』と、子供を見ても、可愛いとすら思えなくなってしまい、だんだんと気持ちが荒んで行くようでした。

内診中も先生がカーテンをばっと開けたかと思うとモニターを指さしながら「これが筋腫、この小さいのが赤ちゃん」と、聞きたくもないのに教えてくれます。それは私の状態を私に説明するために仕方ない事のですが、カーテンを開きっぱなしでする話ではないと思いました。

また、カーテン開きっぱなしで私の診察中なのに、他の先生や看護婦さんがやってきて、その先生に他の患者さんについて話したりします。デリカシーのカケラもありません。本当に嫌な経験をしました。そういうことが何回か続き、やっと「病院を変えよう。」と思い始めました。家族中が喜んでくれた妊娠だったのに、なぜこんな事になってしまったの？事がここに至るまでに、私が心に受けたショックは、あまりにも大きいものでした。

●大学病院から広尾メディカルクリニックへ

手っ取り早くできること！ということで、まずはインターネットで念入りに探してみました。運悪く広尾のサイトはそう簡単には見つからず、探し始めて３日目でようやく発見できました。それまではどのサイトでも〝妊娠中手術をすることはない、安心して産める・・〟というような事しか書いてありません。

でも、私は『このまま治療せず筋腫が大きくなって、その時に初めて、赤ちゃんもダメ、子宮も全摘になったらどうしよう、私は一生子供が産めなくなっちゃう？』と不安に思っていたのです。やっぱり筋腫の治療はそういうモノなのかなぁ・・と治療を諦めかけていた、ちょうどその時、広尾のサイトに辿りつきました。

体験者談を読み、私の不安が的中していると分かり、急いで広尾に電話をして予約をとりました。初診もかなり混んでいたようで、１週間後の予約がやっととれました。サイトを見ると、妊娠初期じゃないと手術できないと

あったので、それだけが心配でした。その時本当はすでに10週が過ぎていたのですが、杏林の医師は「小さいから５～７週だね。」と言っていたので、とりあえず、行って見ようと思ったのです。

初診は主人と一緒に行ったのですが、一緒に行くまでが大変でした。この時の彼も私と同じように「大学病院」というものに洗脳されていて、「そこ（杏林）の先生が何も言ってないんだから、わざわざ他の、しかも、小さい個人病院に行く必要なんて無い！」と思い込んでいたのです。彼にもサイトをみてもらい、とにかく一緒に行って話を聞こう、と説得しました。

●妊娠１６週目の手術

広尾では、早速腹部のエコーから診ました。画面に映し出された画像を見てびっくり！赤ちゃんがこんなに大きく映し出されたのを見たのは初めてだったのです。いつもいつも「小さい」と言われ続けた赤ちゃんでしたが、斎藤先生の診察で初めて「大きく元気な赤ちゃんだねぇ。」と言ってもらえたのです。

しかし、その後待っていたのはショックな言葉でした。「麻酔の先生が変って、妊婦の手術を嫌がるんだよ。まずは、ＭＲＩを撮って、それから僕が説得してみるからね。」ここに来れば絶対に助かる！と思い込んでいた私にとっては、かなりのショックでした。それに反して彼は「良かったね。もうこれで安心だね！」と、なぜか呑気。「まだ手術できるかどうかもわからないのに、何言ってるの？」とイライラしながら聞いたら、「あの先生なら大丈夫だって。絶対に助けてくれるよ！！！」と、あくまで前向きでした。

そして次の週、ＭＲＩを撮りに佐々木病院へ。その結果を持ってドキドキしながら広尾に向かいました。私の不安をアッサリ裏切り、斎藤先生は簡単に「１６週で手術だ。」とおっしゃいました。えっ、麻酔の先生には相談しないの？ＯＫ出たの？とポカンとしていたら、「１６週以降なら麻酔はＯＫ、それを過ぎたら僕が手術できなくなっちゃうから。」とのこと。「良かった良かった、赤ちゃんは助かるよ！」という先生の言葉で涙が溢れだしました。

今まで、どの医師にも私の妊娠を祝福してもらえず、たらい回しのように色々な医師に回された私にとって、一緒に喜んでもらえたことが、心底、嬉しかったのです。しかも赤ちゃんも助かるし・・。

手術と決まったら、今度は母親を説得しなければなりませんでした。母は妊娠中の手術に大反対で、赤ちゃんに何かあったら大変！と思っていたのです。でも、このまま放っておいたら〝赤ちゃんに何かある〟どころではない状況なのです。術前検査の時、母も連れて広尾に行きました。正直なところ、母の体質が遺伝したからこうなったと考えていたので、母にあまり心配やプレッシャーをかけたくないなぁ、と思っていたのですが、斎藤先生は、「お母さんがいけないんですよー、お母さんの遺伝ですよ、きっと。」とハッキリと言ってしまったのです。

私は母が気分を害さないかとドキドキしていましたが、母はケロっと「やっぱりそうですよねー。」などと、明るく会話をしていました。母も主人と同様、斎藤先生マジックにかかってしまい、「これで安心ねー。」と帰り道では呑気に言っていました。何を言っても嫌味じゃない、斎藤先生の人柄のお陰だと思いました。

●人生最悪の‥

手術までは期間があったので、その間に赤ちゃんに何かあったらいけないと思い、嫌々ながら大学病院に通っていましたが、今回が最後だという日に、最悪な医師に当たってしまいました。その人は「教授」という偉い人らしく、話し方も偉そうでした。内診の時いきなり指を入れられ、お腹を思いっきり押されて、「あーこれかー。」と一言。

カーテンを開けられて、「何で妊娠前に手術しなかったの？こんなに大きくなるまで放っといてー。」私がびっくりして何も言い返せないでいると、続けて「もうこんな歳なんだから、検診くらい受けていたんでしょう？」何なのこの医者は？！と思いながら、ムカついて、わざと何も喋らないでいると、こっちの気持ちに気づいたのか、その時初めてカルテを見て「あー、妊娠で初めて（筋腫だと）知ったんだねー。」と、急に態度を変えました。

自分が診察する患者のカルテぐらい、診察前に目を通したりしないのでしょうか？それさえ見れば初診ではないのですから、私が今、どういう状況なのかは解る筈ではないでしょうか？教授だか何だか知らないけど、本当に不躾で、腹が立ちました。「こんな病院、２度と来るかー！！！」と誓った日でした。

余談ですが、普段は占いなんて信じない私ですが、今年の誕生日から12年に１度の最悪な年の始まり！と雑誌にあり、それが妊娠だ！筋腫だ！という騒ぎになった時期と一致していたので、今回ばかりは雑誌を買いまくりました。５月頃から運気は上昇とあったのは、ちょうど斎藤先生に手術を受けた時期と合致します。この占いは、ズバリ当たっていたようです。

●広尾での手術

いよいよ手術日、やっと普通の妊婦になれる！という思いでワクワクしながら、手術にのぞみました。妊婦ですから、最低限の麻酔しかできなかったので、途中からかなり痛みを感じていました。でも私は16週目というこのタイミングでしか手術を受けられなかったため、手術を待っている方々の順番を飛ばして手術してもらっていました。

なので看護婦さんたちにも迷惑をかけちゃいけない！という思いから、少々の痛みは我慢しよう！と決心していたのですが、最後、おへそのあたりを縫っていた時に痛みが最高潮に達し、思わず動いて、暴れてしまいました。色々な器具が外れてしまい、先生をはじめスタッフの方に大変なご迷惑をかけたと思います。

実は初診の時、麻酔の先生の許可がおりなければ、「麻酔なしでも手術を受けさせて下さい！」という気持ちだったのですが、言わなくて良かったーと思いました。本当に麻酔なしで手術されたら、痛みに耐えられず何をしでかしたか分かりませんから・・。

病室に戻ってから、看護婦さんたちは来る度に、「よく頑張ったね、すごく痛かったでしょう？」と声をかけて下さいました。みなさん優しく、本当に申し訳ない気持ちでした。入院生活は快適でしたが、私には心配事が１つありました。退院後、どこの病院に行くか？です。斎藤先生によると、広尾で手術した患者は嫌がられるとのこと。もう絶対に杏林はイヤ！他の大学病院で色々探してみて、近場の慈恵第三病院に決めました。

●良い先生との出会い

斎藤先生が作ってくださった手術記録のミニバージョンと紹介状を、慈恵の先生に渡しました。その先生は、斎藤先生をとても褒めて下さって、「奇跡だね！」と、毎回言ってくれます。「この状態（術前のＭＲＩ）で、今、赤ちゃんが元気なのは奇跡に近いことだから、何としても元気に赤ちゃんを産んでみせよう！この先生（斎藤先生）がイヤなコトを全部やってくれたから、あとは僕が一生懸命頑張るから。」と嬉しいことを言ってくれました。

斎藤先生のことを褒めて下さると、私もとっても嬉しいんです。誇らしいほどの気持ちになります。その日、別の場所で看護婦さんから検診の内容を聞いていたら、後ろの診察室から、「子宮全摘」という声が聞こえてきました。「・・・どうするか、お家の人と考えてみて。」と先生の声が聞こえたので、これは！と思い、思わず立ち上がってしまいました。広尾を紹介しなきゃ！と思ったんですが、私も後ろの人も診察中だったので、身動きがとれませんでした。結局その人に広尾を紹介することはできなかったのですが、その人も、このサイトを見てくれれば・・・と願っています。

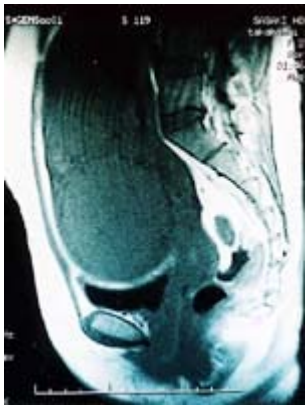
後日、斎藤先生が書いてくださった手術の記録を改めて読み返してみると『胎児のいる胎胞部は膨大化した筋腫により圧迫され、生育不可能が予測でき、流産・死産は免れない状況。しかも数週間ともよみとれる。その時がきても、残留する胎児・胎盤などが危険を伴う為に出産は不可能。子宮全摘も起こりえる内容です。』とありました。

手術前の私の赤ちゃんは、５７５ｇもの筋腫に圧迫されて、発育が悪いどころか、流産・死産に向けて秒読み体制だったようなのです。また、例えば流産・死産が起こった場合、筋腫が大きすぎて子宮内部の残留物が取り除けない可能性も非常に高く、私の命にも危険が及ぶような状態らしかったのです。

そんな崖ッ淵の状態だった私と赤ちゃん、そして私の子宮を、斎藤先生は救ってくださいました。筋腫を持ちながら妊娠して、私と同じような大変な状態に陥っている方がこの体験談を見ていたら、なるべく早く斎藤先生の診察を受けてみてください。赤ちゃんも子宮も助かる道が、開けるかもしれません。

とりあえず、赤ちゃんは順調！退院するとき、斎藤先生が赤ちゃんの様子（エコー）をビデオに収めてくれました。正直、先生の説明なしではどこが目鼻で手足か分かりませんが、これは私たち夫婦の一番の宝物になっています。今（２００１年８月中旬）は、私の身体の方がバテバテ気味なので、出産まであとちょっと、頑張ろうと思います！

慈恵の先生に「これから怖いのは、子宮破裂だ。」と言われ、そのため、来月中旬から入院し、１０月上旬に帝王切開する予定になりました。最初はちょっと怖かったのですが、５月から運気は上昇・斎藤先生の手術を境目に私の運は上向いているはず、斎藤先生の手術なのだから大丈夫だろう！とあくまで呑気に構えています。出産～その後の様子もご報告させていただきますので、しばらくお待ちください。

術前(pre-ope)のＭＲＩ	摘出物
	

	術 前 (pre ope)	術 後(post ope)
赤血球(RBC)	377	-
血色素 (Hb)(g/dl)	11.6	-
ヘマトクリット(Ht)	33.6	-
CA-125	15	-
備考		

Copyright(C)2001
HIROO MEDICAL CLINIC

レポートNo.84

「妊娠9週目にして手術。子供と私の子宮は救われました。」

豊田 芳（３２才）

●今は遠い昔のような「妊娠9週目の手術」

私は妊娠９週目にして筋腫の摘出手術を受けました。何らかの処置をしないと子供はおろか、私の命さえ危ういと言われていたような状態で、子宮を残してくれる、子供も大丈夫と言ってくださったのは斎藤先生だけでした。

出産こそ帝王切開でしたが、斎藤先生の手術のお陰で、今は「筋腫なんてあったっけ？」と思える程、普通の妊娠・出産で、健康に過ごしています。手術で救われた子は、今、１０ヶ月になります。（２０００年８月現在）スクスクと大きく育ち、本当に生まれてきてくれてありがとう、という思いです。

●筋腫に対する認識

私はいたって健康で、カゼも滅多に引かないタイプでした。大きな病気やケガの経験も無く、自分の健康を満喫して生きていました。'９５年に結婚。結婚当初は子供が欲しくてたまりませんでしたが、２年３年と経ち、なかなか子宝に恵まれず、「できないものは仕方が無い」と少々諦め気味になっていきました。

そんな折、痛みは多少あったものの、出血は普通だと思っていた生理に変化がありました。３０歳頃から出血に大きな塊が混じるようになったのです。「これは何か変だ」と感じ、年齢的にも癌検診を受けておこうと思っていた頃だったので、近所の個人病院の婦人科へ、検査兼ねて診察を受けに行ってみました。この時は「小さい筋腫があるが、激しい症状が出ていないし貧血もないので様子を見ましょう。」という事になりました。子供ができないのは筋腫があるから、とは言われませんでしたが、自分の中では漠然と、子供に恵まれない理由を悟ったような気がしました。

経過観察で通院を続けるうちに少しずつ筋腫は成長し、ある時のエコーで握り拳大と確認、医師からホルモン療法を薦められ、点鼻タイプのホルモン剤を半年ほど続けてみました。結果、筋腫は小さくなり、それ以上ホルモン療法を行うことはありませんでした。（お薬をもらいに行くのが面倒だったせいもありますが・・。）私の場合、筋腫があることで日常生活や自分の健康を著しく害している、という事が無かったので、筋腫があることをあまり重大な事として捉えてはいませんでした。

●嬉しいはずの妊娠が‥

ホルモン療法を止めて３～４ヵ月後、「妊娠してるかも？」と感じたので、検査のため前に行っていた産婦人科に行きました。が、筋腫が邪魔で、子供がエコーでは見えないと言うのです。尿検査では確かに妊娠の反応はあるので、間違いなく妊娠しているというのに。

この時、２０００年３月末。妊娠５週目くらいでした。こちらの先生に「個人病院では手に負えないので大学病院に行って下さい。」と言われ、駅前にある一番近い大学病院に行くことにしました。

翌週。大学病院に行きエコーで診ていただいた時に、こんな大きな筋腫は病院始まって以来だと言われました。確かにまだ妊娠５週目程度だというのに、そろそろ生まれる？というようなお腹です。この時のお話はショックなものでした。「このまま妊娠しつづけて、万が一流産した場合、筋腫が邪魔で掻爬できない可能性があります。もしそうなったら子宮ごと摘出するしかありません。筋腫だけ手術で取る方法も、通常の状態ならば選択肢のひとつですが、妊娠してる場合は出血が多くなるので非常にリスクが高く、勧められない。

また、うまく取れなかったら結局は全摘出になります。あなたの妊娠にはちょっと覚悟が必要です。」筋腫がありながらの妊娠でしたので、本などから得た知識から、流産のリスクや出産のリスクが高い事は知っていましたが、こんな大事になるなんて思ってもいなかったので、おろおろとパニックを起こしていました。例え今いる子供が不運にも流れてしまっても、子宮さえあれば妊娠できる可能性は残っていますが、子宮まで失ってしまったら、二度と子供は持てなくなるのです。

安静を保つために入院して、６～７ヶ月まで胎児を育てて早産させるという方法もあると先生に伺いましたが、とにかく夫にこれまでの経緯を報告して、どうするかを相談することにしました。

●私の進める道は広尾しかない

夫はすぐさまインターネットで私のような状態を治療した症例を探してくれました。広尾メディカルクリニックを発見し、妊娠しながらも手術を受け、無事出産という症例がいくつかあり、手術を受けるかどうかは後で考えればよいので、とにかく診察を受けよう、と、早速翌週に予約を入れて、夫婦二人して出かけました。

初診のとき、斎藤先生は自信満々で「赤ちゃんがお腹にいても大丈夫です。」とおっしゃいました。こんな先生は今までお目にかかったことがありません。普通の医師は、どんなカンタンな手術でも１００％大丈夫とは言わないものです。人間のやる事に絶対はあり得ないから。なのに斎藤先生は「大丈夫。」と一言。ただし、「筋腫が無くなったからと言って、流産のリスクが皆無になる訳ではないよ。」とも、おっしゃいました。確かにそうです。健康な子宮でも流産する場合はあるのですから。

ただ、私には選択肢がありません。体験談を見て、たった１週間で退院してしまうことが漠然と不安でした。「だってお腹を切ってるクセに。」と。ですが現実はそんな事を気にしていられる状況ではないのでした。妊娠していなくて筋腫だけを何とかするのなら、他にも何か治療方法はあるのかもしれませんが、既にお腹には子供が居ます。子宮を残して筋腫を取り去り、赤ちゃんも無事でいられるなら、私はここで手術を受けたい。というより、広尾メディカルクリニック以外に私の子宮を救える病院はありませんでした。手術してもらえるならぜひ受けたい、そう思いました。

手術費用のことは多少ネックになりましたが、夫婦してじっくりと話し合い、やはり手術してもらおうという結論になり、翌日に手術を受けたいと電話をしました。この時点でおそらく６週目。斎藤先生から「９週目に手術しよう。」とお話があり広尾メディカルクリニックでは異例の早さで手術を受けることになりました。

●初めての手術で知ったこと

この間の出来事は、実家の親にも夫の親にも報告していませんでした。自分で何も決めないうちに話だけしても、心配させるだけなのは分かっていましたので、ある程度方向性を決めてから・・と思っていたので。

広尾での手術を決めてから、実家（新潟）に報告をしたら、親が新潟から飛んできました。夫の両親もビックリし、両家を巻き込んで？の大騒ぎになりました。親が心配したのは、子宮が残せて子供が無事でも、手術が子供に悪影響を及ぼさないか？という事。それは私もちょっと不安に感じていたことでしたが、斎藤先生からは「この手術程度で悪影響が残るようだったら、私たちは普通の生活はできないよ。普段から色々な場面で放射能やレーザーは浴びているんだし、出産でも腰椎麻酔はかけるんだから。」と説明していただき、納得して手術を受けることができました。

この手術を受けるまで、今まで生きてきて気付かなかったことを二つ、思い知らされました。ひとつは自分が閉所恐怖症かもしれないということ。術前検査のＭＲＩの怖かったこと。撮影のためとは言え、固定され身動きできない状態で、あの狭いドームの中に放置されるのが、たまらなくイヤでした。

二つ目は痛み。最初にもありますように、私は大きな病気やケガをすることなく、今まで過ごしてきました。そのお陰か、「痛み」に対して免疫が全く無いのです。手術直後から傷が痛み、結局翌日まで眠れずにいました。お腹を切るのがこんなに痛いことだとは。それに、妊娠したままですので、朝の起き抜けにツワリの吐き気があり、その時に傷が痛むこと痛むこと・・。ツワリの吐き気と嘔吐時の傷の痛みで、全身から脂汗をダラダラと流していました。

入院中はツワリのせいで、食事が全然美味しく感じられず、「病院の食事って美味しくないのね・・。」と不満に思っていました。（後に出産で別の病院に入院して、広尾の食事は美味しかったのだと気付きましたが・・。）また、こんな状態で本当に土曜日に退院できるのかしら？体験談の人達みたいにスルスルと元気にならないのは、私が何かオカシイのではないかしら？と不安もありました。

金曜日のお茶会も、昼食のお寿司はやっと半分くらい、食後のケーキもいただけません。私にとっては人生最悪の状態でしたが、立ち居振舞いだけは、辛いけど何とかなるまでに回復していました。

入院中は義母が家の事をしてくれて、本当に助かりました。実は、妊娠が判ってから広尾ＭＣで手術を受けるまでの１ヶ月あまりのことを、私はあまり良く覚えていません。短期間に、

妊娠：嬉しい！→
筋腫が大きくて危険：ショック！落ち込み→
広尾ＭＣを見つけた：希望→
手術・入院：痛い・不安、

と目まぐるし状況と感情が変化したせいでしょうか。とにかく突っ走ったという状態だったので。 広尾ＭＣの入院中が３月末から４月上旬で、季節が大きく変わり桜も咲いていたというのに、この時は桜を見たのかどうかさえ記憶にありません。

私の場合は、胎児の影になっている部分は手術できないので、その部分にある筋腫は残っている、ということでした。これは術後に斎藤先生からハッキリ言われていましたし、産後の検診でも筋腫が残っていることは指摘されています。ですが、子供を子宮ごと失うより、はるかに良い結果を得られたのですから、私は満足でした。

●術後にスクスクと育った赤ちゃん

術前のＭＲＩでは、筋腫のせいで左側にひしゃげて写っていた赤ちゃんの影も、術後３日のエコーでは、子宮の中心に真ん丸く可愛らしく写っていました。邪魔者がいなくなり、本来の自分の場所に戻れたのでしょう。

退院後、キズの消毒は見た目が生々しくてイヤでしたが、１ヶ月もすると自分でも「もう大丈夫かな？」というくらい元気になりました。退院後２週間ほどは、実家から母が来てくれましたので、楽に過ごさせてもらいました。私の筋腫は９６０gもありました。それが無くなったので臨月のようだったお腹が引っ込み、「あれは脂肪じゃなかったんだ。ヨカッタ。」と一安心です。

大事を取って、斎藤先生からはＮＩＣＵ（新生児集中治療室）のあるＴＨ医大を紹介されました。ＴＨ医大の先生からは、「大きな筋腫を取ったんだね～。とりあえず子宮を手術しているので、自然分娩は無理、帝王切開になりますよ。」と言われただけでした。

赤ちゃんはスクスクと育ち、あんな大手術を受けたのかしら？と思うほど、全く普通の妊婦として過ごしました。それなら近所の病院の方が通いやすいな、と思い転院を申し出たところ、アッサリＯＫ。最初の近所の医大病院に通うようになりました。

３８週目に帝王切開で出産。ちょっと切迫気味だったけど流産まではいたらず、無事子供は生まれました。通常、広尾ＭＣでは内臓の癒着を予防するため、術後２日から歩かされ、退院後も「くれぐれも良く動くこと」と言い渡されるのですが、妊娠していた私はそうもいかず、あまり動けませんでした。そのためか内臓が少し癒着を起こしていたようで、通常より手術時間が長引きました。

すると案の定、麻酔が切れ始め、手術の終わりがけは激痛でした。広尾ＭＣの手術が特別痛いのではなく、私自信が「痛み」を耐えられないのだ・・と、またまた認識させられました。子供が無事に生まれ、周囲の目は赤ん坊に釘付けです。「あれ？私の心配は？」と思いましたが、世の中そんなもののようです。

私も自分のことで手一杯でした。産後の回復もいたって順調。とてもあんな大手術を経て出産したとは思えません。私の帝王切開を担当された先生が「子宮の傷が、まだ生々しかったよ。」とおっしゃっていました。糸（時間が経てば溶ける）がまだ残っていたそうです。手術の経験豊富な医師でもそんな風に感じる事があるんだな、と思うと、ちょっとおかしい感じでした。最近生理が戻ってきましたが、それは驚くほど軽く、痛みは全くありません。出血も以前より減っているようです。

●虎太朗と斎藤先生の「ご対面」

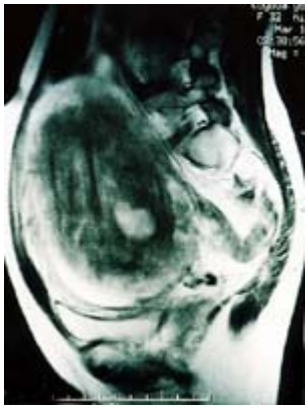
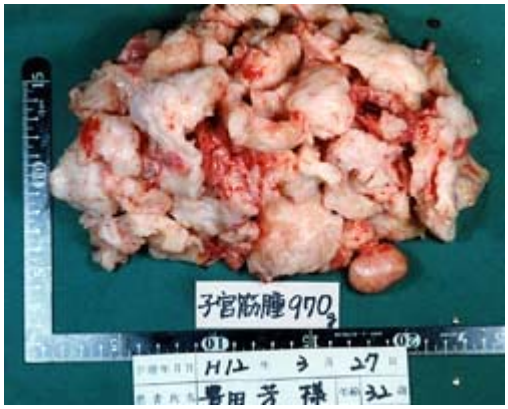
生まれた男の子に「虎太朗」と名づけました。先日、家族３人で斎藤先生を訪れましたが、普段から虎太朗は、メガネの人は嫌います。なのにこの日メガネをかけた斎藤先生にお会いしても、人見知りする様子が全く無く、ご機嫌でした。自分を助けてくれた人は分かるのかしら？と思うほど。

夫はあまり多くを語りませんが、写真をご覧いただければ見て取れるように、虎太朗を抱っこする姿は大喜びの父親の顔です。今、こうして親子３人が幸せに居られるのも、斎藤先生のお陰です。本当に感謝しています。

●手術･出産を終えて思うこと

個人病院で自由診療だと、どうしても不信感や不安が先に立つと思いますが、広尾メディカルクリニックに関しては、そんな心配は無用です。先生の的確な診断にキビキビと働く看護婦さんたち。私はとても安心して入院できました。

費用が高額なので誰にでも薦められるというわけではありませんが、こういう病院もあるのだという事を知っておけば、どうしても納得いく治療を受けたい時の切り札にできるはず。手術を受けるかどうかは、斎藤先生に診察を受けてから考えればよいのです。自分のためにも、治療の選択肢を広げてあげてください。

術前(pre-ope)のＭＲＩ	摘出物
	

	術 前 (pre ope)	術 後(post ope)
赤血球(RBC)	398	-
血色素 (Hb)(g/dl)	12.2	-
ヘマトクリット(Ht)	35.6	-
CA-125	270	-
備考	●妊娠、筋腫合併 15週時に核出術。 胎児を救い、分娩させた。	

Copyright(C)2001
HIROO MEDICAL CLINIC

レポートNo.85

「筋腫だと思っていたら‥」

中野直美（３３才）

“開けてビックリ！”・・・・。私の手術はそんな感じで始まりました。２０００年９月２５日に手術をして、摘出されたものは合計１４６ｇ。（●内膜ポリープ １ｇ ●平滑筋腫 ５ｇ）

ここまでは、今まで広尾ＭＣで手術された方のお腹からも摘出されていますが、私のお腹の中にあった一番大きい１４０ｇの腫瘍は、なんと腸の腫瘍だったのです。広尾ＭＣに来る前の病院では「子宮の外側にできるタイプの筋腫だろう。」と診断され、さすがの斎藤先生も腸からの腫瘍だったとは思っていらっしゃらなかったようでした。

病理検査の結果には『大腸粘膜内塊状腫瘤』と厳めしくプリントされており、斎藤先生の手術記録には、大腸の外側にできたこの腫瘍を薄皮１枚残して削ぎ取るように切除したというような説明が、図入りで書かれてあります。

●出産後の急激な体力の低下

私はもともと生理は辛い方。母も若い頃きつかったと聞いていたので「遺伝かな・・。それとも自分に我慢が足りないから“痛い・つらい”って言ってるだけなのかな？」という程度の認識でした。出血量は他人と比べられないので判断のしようがありませんが、気をつけないとシーツに失敗してしまうくらいは多かったと覚えていますし、多い日は高性能ナプキンだけでは心許なく、タンポンも併用していたので、かなり多かったのかもしれません。

社会人になってから困ったのは、都心へ向かう満員電車で、生理日の通勤途中に度々気分が悪くなったりした事でした。社会人１年生時代は、市販の鎮痛剤でごまかして何とか頑張り、２年目からは就業規則で定められている生理休暇を取り、無理をしないようにしていました。ですが特に“病的”だとは感じておらず、自分では至って“普通に健康”に過ごしているつもりでした。

結婚して家庭に入ってから主婦検診を受けるようになりましたが、特に健康上の問題を指摘されるような事はありませんでした。３１歳の時、２人目の子供を産んでからというもの、どうも体が疲れやすく、すぐにだるくなるような体調が続いていましたが、当時は「手のかかる小さな子供が２人もいるから疲れているのだろう。」と考えていました。今思うと、これが変調の兆しだったように思います。

昨年（２０００年）４月、主婦検診でヘモグロビン値が少し低いので食生活に気をつけましょう、という程度の注意を受けましたが、これが広尾ＭＣで手術するまでのジェットコースターのような日々の始まりでした。

●異常発見から手術までの41日

２０００年7月２０日頃

カゼの治りがどうも悪いようで、セキが止まりません。近所の内科にかかり、２回ほど風邪薬をもらいに行きましたが一向に回復する様子は無く、セキと微熱が続いていました。８月に入ってもそんな調子がずっと続いていましたが、「栃木の実家に帰省してゆっくりさせてもらえれば治るわ。」と楽観視。

８月９日

実家に帰省しました。４日もゆっくりさせてもらっているのに、夕方になると３８度４分くらいの熱。更に"だるさ"を強く感じるようになりました。これは単なるカゼではなく何らか体がオカシイのだと思い、市内の総合病院へ。その日は検査などはせず、カゼがこじれたのだろうということで、お薬を処方されて一旦帰りました。

８月１６日
相変わらずの不調。やっぱり体調がおかしすぎると感じ、再度総合病院へ出向き検査をお願いしてみました。すると血液検査でヘモグロビン値５．９。即入院です。こんなにヘモグロビン値が低下しているという事は、身体のどこかから出血しているかもしれないという事で、更に詳しく検査をすることなりました。バタバタと入院・検査をしたので、どんな検査をしたか詳しくは覚えていないのですが、胃カメラを飲んだ後、「胃に異常はないけど、粘膜の色が薄いね。」と言われた事が妙に印象に残っています。貧血が進むと裏まぶたの赤みが無くなると言われていますが、胃の粘膜も赤みを失っていたのでしょうか・・。

その後ＭＲＩの画像診断で、下腹部に筋腫のような腫瘍があると分かりました。医師は「開けてみないと正確な事は言えないが、子宮の外側に大きな腫瘍があるようです。内膜症なのか筋腫なのかは開けてみないと分かりませんが。月々のひどい生理が貧血の原因と思われます。他には異常が見当たらないので・・。」とのこと。青天の霹靂とはこの事です。更に「ホルモン療法で症状を抑え筋腫を小さくしていく方法と、手術で筋腫だけを取る方法がありますが・・。」「もうお子さんを産むつもりが無いなら子宮ごと取る事をお勧めします。筋腫は核摘出しても、再発する確率が高いから。」と言うのです。私の頭の中は「え～～～っ！？そんな・・」という言葉で埋め尽くされました。

ＯＬ時代の健診でも今年４月の健診でも、妊娠中ですら貧血などなく、“ 問題なし ” と言われてきたので、自分は全く健康だと思っていたのに、“ まさか自分が・・！！ ” と相当なショックでうろたえていました。「子宮は摘出しても卵巣は残すので、更年期障害が起こる事はないですよ。」とその医師は言っていましたが、私は「そんなの絶対ウソ！」と思っていました。「卵巣は子宮のために働いているはず。なのに子宮が無くなったら卵巣だけで満足に機能するワケがない！」と。

こうなると逆に貧血がひどすぎて助かりました。とりあえずは貧血を改善しない事には手術できないということで、そのまま入院して貧血治療を受けることに。増血剤の注射や点滴は私には合わないのか、毎回気分が悪くなります。すっかりナーバスになった私は、子宮を取ってしまうかどうするか悩みに悩んでいました。それでもあまりの体調の悪さに、「もう子供も２人授かったし、再発してまたこんなに体調が悪くなるのも困るし、摘出手術してしまおうかな・・。」と弱気な考えに流されつつ、入院の日々を送っていました。

８月２４日
貧血を多少改善して退院。８月３０日にはヘモグロビン値８．６、９月６日には１０．７まで回復し、手術できる数値まで上がってきました。弱気になっていた入院中、「実家にいる間に手術を受けた方が、家族にも負担をかけずに済むし、これからが楽なんじゃないか・・？」と無理に自分を納得させて、９月１０日に入院・９月１２日に摘出手術の予定を入れましたが、入院中、子宮の摘出をイヤがって悩んでいた私に、主人がインターネットで探してわざわざプリントして見せてくれた “ 広尾メディカルクリニック ” が気になって仕方ありません。半信半疑でしたが子宮を残すためには選択肢がありません。あれこれ思い悩みつつも冷静に考えて出た結論は「やっぱり子宮を取ってしまうなんてイヤだ・・！！」でした。

９月７日
やっぱり子宮全摘なんてイヤ！広尾ＭＣに行ってみる！と決心し、「気になる病院があるので、いちおうそちらでも診察を受けてみたいし、一度横浜に戻って摘出するかどうか考え直してみたいんです・・。」と手術の中止を申し出て、手術はキャンセルし、逃げるように横浜に戻りました。そして実家から予約しておいた広尾ＭＣに行ける日を待ちました。

９月１９日
待ちに待った初診の日。ラッキーなことに、この日の夕方に佐々木病院のＭＲＩ予約が取れたので、ＭＲＩを撮ってもらい更に詳しい診察をしてもらえました。「これはもしかしたら卵巣が腫れているのかもしれないね。」とおっしゃる斎藤先生の言葉、やっぱり来てみて良かった。私の貧血の数値が普通ではない事を考慮してくださり、貧血の状態が長く続くと色々な臓器に負担がかかってタイヘンな事になる、という先生の判断で、「来週なら手術が入れられる。」とおっしゃってくれました。

しかし、手術日が迫っているので、すぐに「９月２５日に手術を受けるかどうか」を決めなくてはならず、あまりにも考える時間の無い状況でした。その手術日は、ちょうど主人が出張で不在。大事な仕事ですし日も迫っているので出張の変更はできないとのこと。そんな状況で入院・手術を受けるのは不安でしたが「一刻も早く手術したい！」という自分の思いに軍配が上がり、「どうしても２５日に手術したい。」と言う私に、主人は「自分がいない時に何かあったらどうする？！」と随分と心配していましたが、栃木から母が来てくれるし、義母も協力してくれるだろうと、やっぱり手術はその日に受ける事にしました。手術費用、説明を伺ったときはビックリ

し、主人も驚いていましたが「手術を受ける本人が納得して手術を受けるならいい。」と言ってくれました。お金はまた貯めればよいのだと思い、手術を受ける決心がつきました。

●開腹してみたら‥

あれよあれよと言う間に迎えた手術日。私は１番最初でした。栃木から母が立会いに来てくれ、子供達の面倒は横浜の自宅で義父母に見てもらう事になりました。手術室に行き麻酔がかかり、いよいよ手術。広尾ＭＣの麻酔は”硬膜外麻酔”といい、痛み以外の感触は感じるし、意識もあるという麻酔です。なので私も麻酔がかかった後も意識はあり、周囲の音声もハッキリ耳に届いていました。

そろそろお腹を開いた頃かしら？と思っていたら、手術室の空気がピリッと変わりました。「これは・・ボソボソ・・・＊＊先生に電話して・・ボソボソ・・。」と、何だか落ち着かない雰囲気。お腹を開かれて身動きできない私を一気に不安が襲います。『どうしたのかな？見立てより症状が悪かったのかな・・？』不安な思いのまま手術終了。先生から「子宮筋腫ではなく、腸にできている腫瘍だった。」と説明を受けました。そして「腸からの腫瘍も処置したが、私は腸は専門ではないので、何かあったら困るから専門医のいる病院に転院してもらう。」と。持たされた手術記録には“大腸手術。術後ケアーのため専門医がある中央総合からの大和田先生、森田先生にお願いします。”と書いてありました。

術後２日経った２７日水曜日の夕方、先生の運転するベンツのシートに横たわり、主人の車を伴って津久井郡の森田病院に転院しました。通常、斎藤先生の術後は３日ほど下腹部からの管を着けて過ごすらしいのですが、私は腸をいじったためか鼻～喉を通って胃の方にも管が入っていて、２日目の昼下がりから歩かされるというリハビリも無く、転院の日まで身動きできず、ひたすら痛みやつらさを耐えていました。この時の私は、付き添いの看護婦さんの肩を借りなければ、フラフラして歩く事もできない位でした。

●ひとりぽっちの入院

転院先の森田病院でも個室だったので、病気について誰かとおしゃべりして気を紛らわすという事もできず、同期入院の人もいないちょっと寂しい入院生活。一人ぽっちだと「ガンだったらどうしよう・・、でもガンだったら痩せてくるだろうから違うはず・・」と、良くない事結果ばかりが頭を巡ります。摘出された腫瘍たちの写真は気持ち悪く、グロテスクに感じました。この一番大きなモノ（腸の腫瘍）の周囲を腸が取り巻き、お腹の中はタイヘンな状態だったようです。

ひとりぼっちも寂しかったけれど、辛かったのは断食状態が長かった事。２５日が手術なので２４日のお夕飯から断食です。私が水を口に含ませてもらえたのは２９日になって。斎藤先生から「病理の結果は良性だったよ。」と連絡をいただき、不安が消えた日でした。その日は黒い水状の排便もあって、術前にお腹を空っぽにして５日間も食べていないのに何だろう？と思っていたら、先生から「血やその他の分泌物が排泄された。」と説明があり、一安心でした。このまま順調に回復して欲しい・・。

３０日の夕方に流動食が出て１０月１日から三分粥、普通の食事を食べられたのは７日になってからです。先生からも「腸の中が細くなっている。」と聞いていたので、なるべく負担をかけないよう、良く噛んでゆっくり食事をするよう心がけました。

腸を手術したため、お腹の管も普通の人より長く着けていたようです。管を抜くとき、「管にお肉が巻きついてる！！』と思うくらい痛かったし、抜いた後も『管の先がお腹に残っていたりして・・・。」と思うくらい、ズキズキと痛みました。

当初の予定では“９月末に退院、１０月７日は子供の運動会！”と家族で楽しみにしていましたが、それどころではありません。結局、また実家の母に来てもらったり、義父母に頑張ってもらい、何とか運動会の日を迎えられてホッとしました。１０月１０日に退院、一旦横浜の自宅に帰り、翌日には栃木の実家へ行きました。目の離せない子供だけを連れて“リハビリ里帰り”です。そして１０月２６日。幼稚園が大好きな長男を長期間休ませるのも可哀想だし、だいぶ体調も戻ったので、横浜の自宅に戻ってきました。

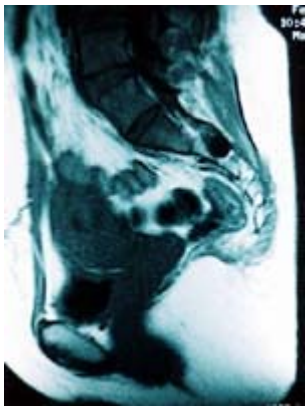
●その後

術後の生理は、出血量は少し減ったかしら？という程度の自覚ですが、レバー状の塊は一切なくなったので実際は随分と減っているのだろうと思います。辛かった腹痛や腰痛も今ではほとんど無くなっています。生理になると具合が悪くなるほど辛かったのに、今はだいたい普段と同じように暮らせます。術前は腸の腫瘍に膀胱が圧迫

されていたのか頻尿気味でしたが、それも解消しました。貧血もすっかり改善されたので体調も良くなり、子供二人を相手に毎日元気に過ごしています。

私の場合、「子宮全摘」と言われてから広尾ＭＣで手術するまでの期間が短かく、すぐに決心しなくてはならない状況に追い込まれたため決断も早かったのですが、この体験談を読みながら迷って悩んでいる方は多いと思います。しかし斎藤先生の後継者が育たない限り、先生の技術は先生一代限りで終わりかもしれません。（そんな事の無いように祈りますが・・。）決して急かす訳ではありませんが、半信半疑でも、診察だけでも受けられる事をお勧めします。そして出来るだけ多くの人たちに、早く元気になって欲しいと思っています。

実家近くの病院で入院していたあの時、自分を騙して子宮を摘出していたら、今頃どうなっていたんだろう？身体はもちろん精神的に・・。想像もできません。斎藤先生は、私のお腹を開けた時にはさぞや驚かれたことと思いますが、それでも冷静な判断のもと最善を尽くしていただき、そのお陰で今の健康な私がいるのです。先生には本当に、言葉では言い尽くせない感謝の気持ちで一杯です。また、転院を受け入れてくれた森田病院の先生方にも、本当に心から感謝しています。ありがとうございました。

術前(pre-ope)のＭＲＩ	術後(post-ope)のＭＲＩ	
		

摘出物

	術 前 (pre ope)	術 後(post ope)
赤血球(rbc)	420	4311
血色素 (hb)(g/dl)	11.7	13.6
ヘマトクリット(ht)	35.8	40.7
ca-125	34	-
備考	●大腸粘膜内の腫瘍 ●子宮腺筋症	

Copyright(C)2001
HIROO MEDICAL CLINIC

病理組織検査報告書

872-045

ファルコバイオシステムズ東京
東京都世田谷区鎌田3-13-6
電話：(03)3417-0701
FAX：(03)3417-0745

広尾メディカルクリニック
斉藤　医員殿（婦人科　入院　　）

検査番号　：　00-08972　　受付日　：　2000年09月27
患者氏名　：　ナカノ ナオミ　殿　33　才　（女）　　報告日　：　2000年09月28
急者ID　：　1413　　免疫　迅速　電顕
臓器数　：　1　臓器名　大腸粘膜内組織

臨床診断　：　Intramural tumor of the colon

病理診断　：　Colon segment : polypoid inflammatory pseudotumor (or soft fibroma) ?

組織所見　：

大腸粘膜内にみられる大きい塊状腫瘤（140g、8×7×4.0cm大）で、割面灰白色、充実性、弾性軟である。
組織学的に、結腸粘膜はびらん状で、表面に炎症性滲出物付着。
粘膜固有層に充血とびまん性の炎症性細胞浸潤がみられます。
その粘膜下織より殆ど全層を置換する腫瘤がみられ、広汎な膠原繊、小、細血管の増生とびまん性の好中球、形質細胞、リンパ球、組織球などの浸潤を伴い、また、一部血管周囲にリンパ球の小集簇を伴っています。

Comment　：膠原繊束のびまん性増生による線維腫様像ですが、びまん性の炎症性細胞浸潤を伴っています。増生する線維芽細胞、線維細胞などの異型像はなく、軟性線維腫あるいはポリープ状炎症性偽腫瘍が示唆され、悪性所見はありません。

病理医：福永　昇

レポートNo.86

「ひどすぎた貧血のおかげで助かった子宮」

藤井千寿子（４５才）

貧血に感謝というのも妙ですが、私の場合は、手術のために貧血を治そうと入院したのに貧血は治らず、結局、その病院での子宮摘出手術は先送りになりました。貧血のお陰で広尾メディカルクリニックに向かえる時間ができたのです。でも、貧血に至るまでの経過はひどいものでした・・。

●忘れていた“筋腫の芽”

５～６年前の癌検診で「筋腫の“芽”があるようです。」と言われた事がありました。その時は「自分の生理は普通」と思っていたので、経過観察をしましょうと言われたまますっかり忘れていました。それが、２年前の冬から急激に生理がひどくなり、恐ろしいほどの出血があるようになってしまいました。

最初は単発で、いきなり“ザーーーッ”という感じでサラサラの鮮血が大量出血。驚きましたが、これ１回で終わり、次回の生理からは元通り。たまたまだったのかな？と思いながら忘れるとも無く忘れて１０ヶ月目、ちょうど３月の卒業シーズンでした。またしてもサラサラの大量出血。大きなナプキンがあっと言う間にヒタヒタになってしまうような大出血。塊もドロドロと出てきました。しかしこれも単発で治まり、また暫く間があいた・・と思ったら今度は本番でした。

８月頃から毎月のようにこのような出血があるようになり、生理痛も激しくなってきました。出血過多でドロドロと出て来るレバー状の塊。これほどトイレを苦痛に感じる事はありませんでした。自分の体からこんなに血が出ちゃって大丈夫なの？と思うほど、便器が鮮血に染まっているのですから・・。

このころから、なぜか氷を好んで食べるようになり、しょっちゅう氷をガリガリと音を立ててかじるようになりました。氷をかじっているのを家族に見られると氷を取り上げられるので、見つからないようにコッソリと・・。口の中が暑くて「氷かじり」が止められなかったのです。

> **貧血と異食症**
> 後日テレビで取り上げられていましたが、このような症状を“異食症”というのだそうです。テレビでは、体内の鉄分欠乏で脳への鉄分供給が不足し、自律神経のバランスが崩れて正常な判断ができなくなったため、“異食”になると言っていました。ただし鉄分が欠乏していなくても、思春期の子供に氷食が見られることは珍しくないそうです。

●手術もできないほどの貧血

あまりにも突然（自分では突然と思いました。）生理がおかしくなったので、「癌かも？！」と思い、国立医療センターへ。内診での診断は「筋腫」、しかもやっかいな筋腫らしく、いくつかある筋腫のコブコブの１つが悪さをしている・・と。取りあえず次の診察の予約をして帰宅したら、先生から電話が入り、血液検査の結果が非常に良く無いので即入院を言い渡されました。そういえばこの頃、体がいつもだるい感じで疲れやすく、階段を昇ると息切れどころか心臓がバクハツするのではないかと思うほどの動悸がしていました。

歳も歳だし更年期かしら？と軽く考えていたら、それらの症状は、全て貧血のせいだったようです。 先生に、「今の状態で無理をしたら、いつ何処で大出血をして、救急車で病院に運び込まれるか分かりませんよ。」と言われて初めて、自分の体がずいぶん良く無い状態なんだなと認識しました。正確な数値は忘れましたが、ヘモグロビン９はとっくに切って６くらいの数値でした。ヘモグロビンが９を越えたら手術だと言われていたのですから・・。

８日間入院し、鉄剤の服用と増血作用のある薬を注射されていましたが、なかなか数値が上がりません。担当の先生は「長期戦だねぇ。」と言い、一旦退院となりました。このとき、貧血がうまく治療できていたら、私の子宮は摘出されてしまっていたのかもしれません。

●ダメモトで出した質問メール

突然入院を言い渡され、あわててインターネットで筋腫について調べ、“広尾メディカルクリニック”のことを知りました。入院前に『ダメモトでもいい。』と思い、自分の病気について質問のメールをしておいたのですが、退院後、丁寧な回答のメールが届いており、色々な回答の後に「大丈夫、残せます。」と心強い一言が！

その瞬間、『取らずに済むものなら絶対に取りたくない！』と強く感じました。女ならば当然でしょう。さっそく初診の予約をして、診察に伺いました。国立医療センターでの貧血治療が上手くいかなくて、本当に良かった・・・。

斎藤先生は、ＭＲＩの画像を見ながら「紀州の梅干があるよ、カラダが疲れるでしょう。」とおっしゃり、私があれこれと説明する前に、体調の事などはお見通しでした。「でも大丈夫だよ、治るよ。」と言われた時には、安心と嬉しさのあまり、涙がボロボロと溢れてしまいました。

ひどい出血を抑え、貧血を少しでも予防する目的で、前の病院からピルを処方してもらっていましたが、ちゃんと服用しているのにもかかわらず手術までの期間、出血が止まることはありませんでした。生理２日目のひどい出血の状態がずっと続いていたのです。

斎藤先生からは「筋腫の最期の悪あがきだよ。」と冗談交じりに言われました。広尾ＭＣでの手術が決まってからというもの、少しでも血を失うまいと、家では時間があれば横になって、大切な血が流れ出ないようにしていました。

●出血のまま手術

手術当日は少し出血が減りましたが、結局止まりはしません。不安な思いで手術に臨みましたが、斎藤先生の「大丈夫だよ。」の一言で安心しました。手術をするのにネックになっていたヘモグロビン値は、自分でも食生活などに気をつけていたせいか、９ほどに戻っていました。ひどい貧血だったのに輸血せずに手術できて本当に良かった。

手術は２００１年２月の最終週。順番は一番乗りでした。なので、手術が終わってから次の日までが長かった事・・。おまけに体中から出ている管が気になって、体も気持ちも全然休まりません。少々の事では外れない、と分かっていても、やはり気になってしまいます。手術中は緊張のあまり呼吸がヘンになり、ちょっと怖かった。今にして思うとムダに緊張しすぎていたのですが・・。

これから手術を受けようと考えている人にアドバイス。看護婦さんに体重を尋ねられたら、決してサバを読んで軽目に言う事無く、正確に伝えましょう。私は少々軽めに申告したせいか麻酔から醒めるのが早く、後半少し痛い思いをしました。痛みを感じ始めてからはラマーズの呼吸法を思い出し、痛みを和らげたりしていました。（本当に痛みが少し軽くなったんです。もしこれから手術を受けられる方はぜひお試しあれ！）

後から伺った話では、麻酔は意識が残るようにかけるのが斎藤先生の理想らしいので、そういう意味では正しかったのかもしれませんが、「痛いです～。」と言ってから追加される麻酔は、効くのに少々時間がかかります。術後、自室に戻ってからも麻酔が効き続けているようで怖かったので、主人に居てもらってずっと話をしていました。

私と同期の方も同じように体重を軽めに申告して、少し痛い思いをされたようです。

●修学旅行のような入院生活

私がちょっと怖かったり痛かったりしたのは手術当日だけで、あとは本当に快適に入院生活を送りました。同期入院の方にとても元気な方がいらして、その方のリードで手術翌日からのリハビリをこなせてきました。同じ日に手術した人が階段をヒョイヒョイ昇っているのに、自分だけ昇れないワケがない・・と、半分意地になっていたようにも思いますが、そのおかげで土曜日までに、退院できるだけの体力が戻ったのだと思います。

入院していたのは、たまたま同年代の３人組。修学旅行のようにお互いの部屋を行き来してペチャクチャおしゃべりをし、楽しく過ごしていました。それに広尾ＭＣの看護婦さんはとてもフレンドリー、かつワガママを言っても快く聞いてもらえます。最初貧血で入院した時のように、妙な遠慮をしたり看護婦さんと距離感を感じたり・・ということは全然ありませんでした。

上げ膳下げ膳の、主婦にとっては夢のような入院生活が、あっという間に過ぎていきました。

●退院してから

術後４週目に生理がありました。先生からは「当分はまだ少し出血は多いから。」と言われていましたが、それでも以前とは比べ物にならないほど出血が減っています！２日目の一番多いはずの出血が、術前の不正出血くらいです。痛みも殆どありません。なんて素晴らしい！健康な生理ってこんななの？と改めて感激しました。

術後はとても体調が良かったのに、退院後まもなく、当時流行っていた“お腹に来るカゼ”を引いてしまいました。さすがにまだ術後間もない時だったのでダメージが大きく、近所の病院にかかって治しましたが、それ以外は何の問題も無くどんどん元気になっていきました。

夫婦は何歳になっても、お互いの肌身を感じる事が大切ではないかと思います。それが毎日のように大量出血していた頃は自分のことで手一杯。夫を気遣うどころではなくほったらかしで、寂しい思いをさせてしまったと思います。退院前に「夫婦生活は術後１ヶ月から大丈夫。」と説明されましたが、不安でした。術後３ヶ月経って術後検診を受け、斎藤先生から「大丈夫。」と太鼓判を押されたときは、本当に様々な心のつっかえが取れて、また涙が溢れてしまいました。女性として普通に健康であるという、ただそれだけの事がこんなに嬉しいとは・・。

●術後検診を終えて‥

私の病気をキッカケに、家族も微妙に変化しました。
お母さんっ子であまりアテにできないと思っていた主人が、想像以上に頼りがいがあり、色々とフォローしてくれました。今まで決して短くない時間を過ごしてきたのに、見た事の無い意外な一面を垣間見て、ビックリしました。上の息子は高校生でそろそろ彼女の一人もいてもいいお年頃。私の病気は良い勉強になったようでした。「彼女ができたら気をつけてあげるんだ・・。」とか何とか言っていましたから。

私の両親や、同居している主人の母にもずいぶん心配をかけました。私がすっかり元気になってから母に、「自分が病気になる方がよっぽど楽だわ。」と言われ、私の今回の入院・手術は、家族みんなに支えられていたのだとつくづく感じました。

術後検診を終えて検診で異常なし・経過良好とのお墨付きが出たので、弟のお店でささやかながら快気祝いを催しました。美味しいピザとワインで、家族で乾杯！主人は一気に気が緩んだのか、酔いつぶれてグゥグゥ寝てしまいました。私も「大丈夫！」とは思いつつも術後の検査結果が出るまでは分からない、という気持ちもどこかにあったので、心底大丈夫なんだという安堵感やその他色々な気持ちが溢れて、酔って泣いたり笑ったりしていたようです。弟の店からはタクシーに詰め込まれて帰宅したようなのですが、記憶が定かではありません。後から息子達に「タイヘンだったんだから・・。」と言われてしまいました。

今（２００１年９月現在・術後７ヶ月）はすっかり元気になって、元から病気などした事の無いような健康な生活を送っています。昨年の写真を見ると、自分だけ顔色が妙に黄色い、最近撮った写真は普通の肌色なのに・・。貧血がひどくなると肌の色がこうも変わるのだと知りました。

●最後に‥

今、筋腫で悩んでこのページをご覧になっているあなたへ。あと一歩踏み出せば元気になれる可能性があるんです。金銭的なこと、周囲の方達の色々な意見、他にもあれこれあって、その「一歩」が踏み出せない気持ち、よく分かります。私もそうでした。でも、勇気を出して斎藤先生にメールを送りました。その一歩を踏み出したから、私は今、健康でいられるんです。絶対に忘れて欲しくないのは、当たり前のことですが、自分の体は自分のもので、自分で守らなければいけない、という事です。

最後になりましたが、あまり沢山の事はお話にならないけれど、確かな技術と優しい眼差しで私達の不安を取り去ってくださった斎藤先生と、いつでも笑顔を絶やさず、親身に私達のお世話をしてくださったスタッフの皆さん、本当に有り難うございました。これからもお体に気をつけて、筋腫で悩む女性の強い味方でいて下さい。

術前(pre-ope)のＭＲＩ	術後(post-ope)のＭＲＩ

摘出物

	術 前 (pre ope)	術 後(post ope)
赤血球(RBC)	349	-
血色素 (Hb)(g/dl)	9.5	-
ヘマトクリット(Ht)	28.8	-
CA-125	9	-
備考	●粘膜下筋腫 ●生理過多、腰痛 ●血色素（Hb）が6となり入院治療を行ったことがある。	

Copyright(C)2001
HIROO MEDICAL CLINIC

レポートNo.87

「自分で医療を択ぶということ」

N．K（４１才）

自分が筋腫ではないかと感じ始めてから、広尾ＭＣで手術をして健康な生活を取り戻すまでの数ヶ月。私にとってこの数ヶ月は、単に病気を治しただけではなく、今までの自分の考えを自ら覆した、自分自身を見つめなおせた貴重な時間でもありました。

●筋腫の家系

私は筋腫の家系とでも言いますか、母を含む親戚の女性には筋腫のために子宮を摘出した人が数人いました。私の心の奥底には「いずれ自分も筋腫になるかも」という思いが、深く沈んで眠っていました。

４０代を迎えた頃、次第に体のだるさを強く感じるようになり、近所のスーパーから買物袋を下げて、家までの僅かな距離を歩くのがだるくてツラい。台所仕事が立ったまま続けられず、コンロの前で椅子に座って調理してみる・・。
最初は歳のせいかしら？と考えたり、私ってこんなに怠け者だったかしら？と情けなくなったりしていましたが、だんだんと「ひょっとして筋腫があるのでは？」心の底に眠っていた気持ちがムクムクと起き上がり、確信めいた気持ちに変わっていきました。生理もだんだんと出血量が多くなり貧血がひどくなっていましたし、母が子宮を摘出した年齢でもありました。ついに私も・・という感じでした。

その頃の生理の多さには、我ながら辟易しておりました。眠る時は夜用の特大ナプキンを４枚重ねにしてオムツのように後ろまでガード。１枚目は浸したようにぐっしょりです。寝ている間の粗相も悩みの種。もう使うことも無いと思って片付けていた赤ちゃんシートを、自分が使うことになろうとは・・。そして出血が気になって気になって、くつろいで眠ることができません。生理のだるさに睡眠不足が加わり、体調は最悪です。

昼間の仕事中には、立ち上がった瞬間に「ザーーッ」と流れ出るのを感じて再び腰掛けることができず、そのままトイレにソロリソロリと移動したり、逆にトイレでザーザー出血してなかなか出られなくなってしまったり・・。痛みこそ無いものの、その出血量は尋常ではありませんでした。

こんな調子では貧血が進行するのも無理はありません。筋腫さえなくなれば、こんな辛い思いをしなくてもよくなるのに・・。「筋腫ならサッサと摘出してサバサバしたい」という気持ちが強くなっていきました。

そんなある時、下腹部が急に痛くなり内科にかかりましたが、内科の医師は「ガスが溜まっているのでしょう」と、整腸剤を処方してくれただけ。私は「これはそんな痛みではない」と思ったので痛みが治まったら近所の国立病院に行ってみました。そこは夫もお世話になり、設備も対応も良いと思っていたので、筋腫なんてすぐに摘出してくれるだろう、と考えての事でした。そう、筋腫なら取ってしまえばこんな辛い状態から抜け出せる、と安易に考えていたのです。母も摘出してしまった後、サバサバと生きていた・・と。

●摘出すればサッパリする、でも‥

国立病院の初診。私は「筋腫だと思うんです」と言って診察を受けましたが、担当医は「そんなに簡単に決められないんですよ」となんだか歯切れの悪い印象。

それからの診察も「あの検査をして、この検査をして・・」と、なかなか筋腫の診断が下らず、具体的な治療に進みません。別の病院にセカンドオピニオンで行ってみたら、すぐに「筋腫ですね」と診断されました。そして手術をして取った方がよいと。同じ手術を受けるなら近所の病院の方が何かと便利が良いので、また国立病院に戻りました。のらりくらりしているように感じた国立病院でも筋腫だと診断され、「３㎝ぐらいの筋腫がありますね。取っちゃいましょう」と言われました。

「え？たった３㎝ぐらいなら筋腫だけ取れないの？」と思った私は、子宮は残せないのかあれこれ質問しましたが、担当医は全摘出とはハッキリは言わないものの、
「残してもまた他の病気になると困るから・・」
「残しても仕方ないでしょう、お子さんも３人いらっしゃるし・・」

「摘出してしまうのが一番安全」
というように、話の進む先は「全摘出」しか無いなのです。

「子宮を残す意味があるかどうかは医者じゃなくて私が決めるのだ！」と腹も立ちましたが、この医師では他に方法も無いようだったし、セカンドオピニオンを受けた病院でも取ったほうが良いと言われたので、それならば一刻も早く摘出を！と３月に手術の予約をして帰りました。

仕事で知り合った婦人科の女医さんに、自分の病状や医師の診断について相談してみましたら「貴女の体調を考えても摘出は止むを得ない。子宮を残す手術は摘出してしまうよりリスキーなので、医師も敬遠するのでしょう」とのこと。

私は、アロマテラピーの仕事をしながら「人間の体には不要な部分など無い」と日頃から考え、またそのようにスクールでも教えている立場なのに、なぜ筋腫だったら子宮は簡単に摘出されてしまうのか？４０歳を過ぎているから？ もう子供がいるから？だからもう不要な臓器なのか？と様々な矛盾を感じましたが、体調の悪さはどうしようもなく、それを根本的に解決するには子宮を筋腫ごと摘出してしまうしか方法が無い、やっぱり取ってしまうしか方法が無いのだ、と釈然としない気持ちを抱えつつも自分を納得させるしかありませんでした。

ところがいざ３月の手術が近づいてみると、手術ができないくらい貧血がひどく、手術は５月に延期、増血剤を服用していたのにも係わらず５月になっても手術ができるほど回復しておらず、再度延期されて８月になってしまいました。

ここまで二転三転すると、職場に迷惑をかけているのが気がかりで、担当医師の夏休み明けに絶対手術してもらえるよう念押しして、８月の手術を予約しました。「自分の夏休みが明けたら」という医師の態度には少しカチンと来ましたが、「２週間入院しても９月には仕事に復帰できる」と仕事のことばかり考えて、職場もそのように調整してもらいました。

「筋腫ってどんな手術をするの？」と思い立ったのはそれからでした。それまでは、とにかく「摘出」しか念頭に無く、医師の言うことに従っていればいいと思っていたので、「筋腫って何？」ということすら考えたことがありませんでした。インターネットで検索してみたら、広尾ＭＣのサイトにヒットしました。そこで目を通していくうちに、斉藤先生は全摘出せずに筋腫を手術すると書いてありショックを受けましたが、国立病院での手術が迫っているし、今更ね・・と思いました。なのになぜだか心がざわめいて、落ち着かなくなってきたのです。

その頃、学校の役員をいっしょにやっていたお母さんとも「同じ病院で（全摘出の）手術したけど、いい先生だし大丈夫よ」と話をし、その時は「ああ、あの先生はいい先生なんだ、大丈夫なんだ」と考え納得しようとしましたが、心のざわめきは一向に止まりません。

広尾ＭＣサイトのページをほとんど全てプリントして、１週間くらい毎日のように眺めて持っていました。国立病院での手術２週間前。居ても立ってもいられなくなり、斉藤先生に自分の病状についてメールで質問してみました。正直言って、回答は期待していませんでした。ところが２日後に「あなたの子宮は残せると思います」というお返事。心の奥に電流が走ったようなショックでした。

●自分の迷いに気づいたとき

「私の子宮は残せるの？でももう手術は予約してあるし、残せるって言われても、どうしよう？私は一体どうしたらいいの？」心に大きな迷いがあることがハッキリ分かり、このとき初めて、手術について夫に相談しました。

調べてみたらこんな治療をしているところがあって子宮は残せるって。でも保険は使えないらしいし場所もよく分からないし、川崎だから遠いし・・、でも残せるんだって。でも国立で手術の予約はしてあるしキャンセルはできないし・・。涙をボロボロ流しながら、心の中に溜まっていた色々な思いを夫に話しました。

子宮の摘出手術に関しては何も言わない夫だけれど、国立病院の手術を予約したときは、「個室をとってあげるから、休暇だと思ってゆっくりしてくれば」と言ってくれていたので、彼なりに気を遣ってくれていたと思います。そんな夫は、泣きながらで支離滅裂だったかもしれない私の話に耳を傾けてくれて「自分の事なんだから、気の済むようにしてみたら？」とサラリと言ってくれました。その言葉にグチグチしていた気持ちが落ち着いて「じゃあ広尾に行って見る」と、さっそく予約の電話をしてみました。

広尾ＭＣ初診の予約は国立病院の手術直前とも言えるタイミングでした。診察時にＭＲＩがあった方がよいと言われたので、国立病院から貸りなくてはならなかったのですが、貸してもらえなかったらどうしよう？担当の先生は夏休みだから相談できないし、大丈夫かしら？と思い悩みながら国立病院に電話をしてみると、あっけないほど簡単に貸し出しＯＫ。ス～ッと気が楽になりました。

逆に、担当医が休みだったことは私にとってはラッキーだったかもしれません。本人から「なんで今更こんなことを？」と尋ねられたら、オタオタしてしまって罪悪感でいっぱいだったかもしれないので。別の若い先生が、「他の病院に行くなら病状の説明も書いてあげましょう」と言って書類を用意してくれました。が、ちょっと泥棒気分。逃げるような気持ちでＭＲＩや書類をいただいて帰りました。この時の気持ちはまだ半々。広尾ＭＣがダメだったら国立病院に戻るんだろうなぁ、という気持ちでした。

●手術を即決した広尾での初診

予約した初診の日、いざ広尾ＭＣへ。有名な病院だからタクシーの運転手さんは知っているだろうと思ったけれど「知らない」と言うし、地図を見せても「分からない」。またしても「有名な病院じゃないの？」と不安になってしまいました。怪しいところじゃないはずなのに・・。そうこうしながらもやっと広尾ＭＣに到着。

看護婦さんが一人で受付にいらして、待っている患者さんが一人もいません。「なんだか暇そうな病院・・」ますます不安になっていた頃に、二階からゾロゾロと女性達が降りて来ました。そう言えば二階が随分と賑やかでした。その中の年配の一人がツツっと私に近寄ってきて、まったく初対面なのに「今日、初診？絶対ココがいいわよ。迷ってるならココにしなさい。ココに来られてよかったわね～」と、ニコニコと仰いました。

ちょっとビックリして「ヘンな人だなぁ」と思ったけれど、異様とも思える明るさとその自信。そしてそのグループのお仲間達。彼女達が明るくキャッキャと帰っていった後、二階から降りてきた斉藤先生。その姿を見たとたん、私はボロボロと泣いてしまいました。先生の姿を見た瞬間に、広尾ＭＣで手術をする！と気持ちが固まっていましたし、何よりも今まで不安に凝り固まっていた心が安心感に包まれ、解けていくようでした。

ということは、今まで自分は、子宮の摘出手術をすることを、「家系的なものだ」「年齢的にも多い」「取ったら楽になる」と、無理矢理に正当化して、諦め、納得しようとしているだけだったのでしょうか？本当の私は、そんな屁理屈に押し込められながらも「子宮を取ってしまうなんてイヤ！絶対に！」と心の隅っこで叫び続けていたに違いありません。そうでなければ広尾ＭＣのサイトを見つけた時に、あんなに心がざわめかなかっただろうし、夫に泣きながら相談するほど迷いはしなかったでしょう。

そして、お医者さんの言う事を聞いてさえいれば大丈夫、と漫然と思っていた自分、「医者」だというだけで自分の体を他人任せにしていた自分は「いい患者」ではなかったと気付きました。そして人に迷惑を掛けるのがイヤで、常に「いい子」でいようと努力し、気を遣っていた自分。「自分のことで人様に迷惑をかけるなんて絶対イヤ」そんな考えに囚われて、納得していない手術でもサッサと済ませようとしていました。

確かに今まで手術の予定が二転三転して職場に迷惑をかけているかもしれない、でも斎藤先生にお会いした瞬間に、「みんなに迷惑をかけるかもしれないけど、予定を変更して広尾ＭＣで手術を受ける」と決心していました。この時、おそらく初めて、自分の体について正面から向き合ったと思います。仕事も大事だけど自分の体はもっと大事なのだ・・と。

こんな気持ちで診察を受けたので、斎藤先生にお話することはあまりありませんでしたが、もう国立病院で摘出手術を受ける直前なのだと話をしたら、私のご近所で、同じ国立病院から広尾ＭＣにいらして手術をされた方がいるとのことで、その場で電話をしてくださいました。

電話の向こうで彼女はとても明るく、「（国立病院には）黙って広尾ＭＣに来ちゃったから、二度と国立病院には行けないわぁ。近いのに不便よねぇ～」と大きな声で楽しげに話してくれました。よくよく伺ったら、本当に逃げるように広尾ＭＣに来たとのこと。私がやろうとしている事は既にやった人がいるのだと知り、少し気が楽になりました。

広尾ＭＣへ手術の申し込みをした後、何と言って国立病院をキャンセルしようか、またまた不安で一杯でした。自分で言うのも変ですが、私は「約束厳守」「周囲に迷惑をかけてはダメ」と真面目一筋に生きてきたものですから、「入院・手術」という大きな予定をキャンセルしてよいのか・できるのか、本当に不安だったのです。

恐る恐る国立病院に電話をしてみると、またしても拍子抜けするほどあっさりとキャンセルできてしまいました。手術のキャンセルなんて病院にとっては日常茶飯事なのだろうと、後から思い至りましたが、この時は本当にドキドキして、担当医が夏休みで本当にラッキーだと思いました。

夫に広尾ＭＣの事を報告したら「キミは強運だから今まで間違った選択をした事が無い。だからきっと今度も大丈夫だよ」と言ってくれました。保険の使えない入院・手術費用についても「特別室に２週間の入院が４週間になったと思えばいいよ」と一切否定的なことは言わず、私を励ましてくれました。

夫の言葉に支えられて、私は自分の選択に自信を持って広尾ＭＣの手術に臨むことができたのです。これで４度目になる仕事の調整も、職場の皆さんが快く承諾してくれてスムーズでした。職場の皆さんには本当に申し訳なく思いましたが、何にも変え難い自分の体のことですから、甘えさせてもらいました。

手術直前だった国立病院では「貧血がひどいのでとにかく生理を止めよう」と、ホルモン療法を行っていましたが、国立病院キャンセル後は当然ホルモン注射も止めることになり、生理が戻ってきました。その出血の凄まじさと言ったら・・。「こんな状態を薬で止めていただけで、根本的には何も解決されていなかったのだ」と自分の体の惨状を再認識しました。綺麗な色の血がザーザー流れていく・・。ああ、もったいない、と何度思ったことか。

●いとおしい子宮

初診から２ヶ月弱。いよいよ広尾ＭＣでの手術。私は一番最初でした。病室で待っている間、持参したアロマオイルで緊張をほぐすアロマテラピーを・・。

術後のためのオイルも用意して、準備万端です。待っていてくれた夫は、手術室から１時間ほどで部屋に戻って来た私を見て「あれっ？もう終わりなの？」と驚き、でも元気そうな私の様子に安心して会社に向かったようでした。

手術中、膣の方から引っ張っているような感触があったのを覚えていましたら、術後に「筋腫分娩だったので膣からも処理した」と説明を受け、納得しました。確かにＭＲＩでは筋腫は子宮の下方に映し出されていて、子宮から筋腫にかけてが曲がった瓢箪のような形になっていました。でもまさか筋腫分娩を起こしていたとは。筋腫分娩を起こしていると生理の出血が激しいそうです。まさに私はそのパターンでした。

入院のお仲間に名古屋からの方がいて、その方は退院後一人で名古屋まで帰らねばならないので、２日目からの「お散歩」にも積極的でした。私も負けてはいられない！と一緒に点滴台を押しながら歩き回りました。

傷の痛みは思った程ではなく、術後、日に日に回復していく自分の体が本当にいとおしいと感じました。先生から手術記録をいただき、術直後の子宮の写真を目にした時は「なんて愛しい私の子宮」と思ったほど。入院のお仲間も自分の子宮の写真を見ながら、口々に「可愛らしい」と話していました。人様から見たらグロテスクな写真かもしれませんが、本当に、心の底から「子宮を残せてよかった」と思った瞬間でした。

特にトラブルもなく無事退院して家に帰ると、ママっ子だった娘がすっかりパパに懐いていて、ちょっとショック。でも「ママおなか痛いから、だっこできないんだよねぇ」と、私を気遣ってくれます。この前まではただの甘えん坊だと思っていたのに。たった１週間の間に、子供は随分と成長するものですね。

術後の回復が早いのも驚きました。手術が９月の末だったので、楽しみにしていた子供の運動会に行けるか気がかりでしたが、問題なく参加できて家族揃って楽しめました。本当に良かった。

術後の生理は、自分が健康だと感じていた若い頃と同じ状態に戻り、出血量が激減しました。巨大なナプキンはもう必要ありません。術直後に６だったヘモグロビン値も術後検診では１１になっていました。術後検診の時、斎藤先生のお顔を見たらつい涙が抑えきれなくなってしまい、またポロポロと泣いていたら「僕に会うたびに泣くんだねー」と先生がノンビリ仰っていたのが忘れられません。ＭＲＩには、すっかり普通の状態に戻った私の子宮がクッキリと映し出されています。この子宮が、今、確かに私のお腹の中にあるのだ・・としみじみ思いました。

●人任せの医療ではいけない

何度も手術が延期になり広尾ＭＣを見つけ、何かに導かれるように広尾ＭＣでの手術に至りましたが、それが私の「強運」なのかもしれません。貧血が改善され体調はすっかりよくなり、数ヶ月前まで普通の家事でへばっていた自分がウソのようです。本当に“ハツラツ”と人生を生きている・・と実感できるのです。そして、こと医療に関しては「人の言うなり」ではダメなのだと、人に少々迷惑をかけても自分が主体にならなければ充分納得の行く医療は望めないのだと痛感したのでした。

自分が子宮を残せて元気になれたこと、本当は声を大にして話したいのだけれど無念さを抱えながら全摘出した人が近くに居たら、きっとその人を傷つけてしまう。そう思うと、同年代の女性の前では気軽に話すことができません。私が子宮を残せたと知って尋ねてくる人にはいくらでも話をしようと思いますが・・。ですから今回の体験談も実名を出したいのですが、イニシャルにさせていただきました。婦人科系の病気のデリケートさを痛感します。

●最後に

「斎藤先生の後継者」は育たないものなのでしょうか・・。斎藤先生とスタッフの方々には本当に感謝しています。ですが世の中にはまだまだ婦人科の病気で苦しんでいる人たちはたくさんいます。斎藤先生のような医師が何人現れても足りないくらいに・・。娘が私と同じ病気にならぬよう、そして一刻も早く子宮を残せる治療法が生まれ、普及していきますよう、医学の進歩を信じて心から祈るばかりです。

術前(pre-ope)のＭＲＩ	術後(post-ope)のＭＲＩ

摘出物	

	術 前（pre ope）	術 後(post ope)
赤血球(RBC)	380	413
血色素（Hb)(g/dl)	6.7	11.9
ヘマトクリット(Ht)	27	38.4
備考	●経産婦　２児 ●筋腫分娩（有茎粘膜下筋腫）：30g ●子宮内膜ポリープ：2g ●腺筋症：4g	

Copyright(C)2002
HIROO MEDICAL CLINIC

レポートNo.88

「夫と2人で乗り越えた幸せへのステップ」

目黒美保（３３才）

●まさかの診断

私は昔から生理痛はひどい方で、お腹の痛みはもちろん出血量も多く、塊もドバドバ出ていました。でもずっとそうだったので、それが当たり前の普通の生理で、自分が病気だなんて微塵も考えていませんでした。

変調が現れたのが２００１年の６月頃。生理でもない時期の腰痛と出血が２ヶ月ほど続いたので、不正出血は「ひょっとしたら妊娠？」、腰痛は「パソコンのやり過ぎかな？」と呑気に考えつつも「何かおかしい」と思ったので、近所の個人クリニックの婦人科に行ってみました。するとすぐに子宮筋腫だと診断され「とにかくひどい！大きい病院を紹介するのでそちらの行って！」と言われてしまいました。妊娠はまったくの期待はずれ、不正出血は筋腫のせいだったのか･･･。

一応、紹介先の大きい病院に行ってはみたものの、担当の女医さんとどうも気が合わないと言うか、女性同士なのだから、もう少し「いたわり」を持って接してくれても･･･と感じてしまうようなツッケンドンな態度、とても通いつづけて治療を受ける気にはなれない印象でした。こんな医師に治療を受けても、結局は全摘出のレールに乗せられてしまうのでは？という気がして、結局１回だけで行くのを止めてしまいました。

私の体調を心配していた夫に、「筋腫があり、あまり良い状態ではない」ことを告げると、「結婚して今までの２年間、充分幸せやったけど、この２年はプロローグに過ぎん。今から２人の第一章が始まるんや。少し波乱の幕開けやけど、絶対元気になって幸せになろな」と、励まされました。普段はとても口下手な夫からこんなに力強い言葉が聞けるなんて。夫の言葉に勇気づけられ、「何とか筋腫を治そう！」と強く決心しました。

●最初は興味が無かったけれど

その後、子宮筋腫はどんな病気でどのような治療法があるのか、知識を得るためにインターネットで調べ始めました。自分に知識がないと納得のいく治療は受けられないと思ったからです。

色々調べているうちに、何回も検索にヒットする「広尾メディカルクリニック」が気になり始めました。最初は「個人クリニックの案内だろう」ぐらいに考えて、まったく気にも止めずホームページも見なかったのですが、あまりにも何回もヒットし、しかも検索結果の最初の方に表示されるので、「ココには何かあるのかな？」と気になり始め、ホームページを見てみました。

するとそこには多くの体験談が掲載されており、夢中でそれらを読み進むうちに「筋腫で悩んでいるのは私だけじゃない、この先生なら大丈夫かも！」と強く感じたので、初診だけでも受けてみようと決めました。

夫や家族は「大病院や大学病院のほうがええんちゃう？」「何で保険がきけへんの？」と不安顔。でも１度決めたら納得いくまで引かない私。不安顔の夫と姉を従えて初診に伺いました。

●泣いてしまった初診

佐々木病院でＭＲＩを撮って、クリニックに向かいました、初めてお会いした斎藤先生はムスっとした感じでちょっと怖く、ビクビクしながらの診察でした。

先生はエコーとＭＲＩをご覧になって、「手術で治せるけど、今は１年待ちの状態。でもあなたはそんなに待たせられる状態ではない。キャンセルか何かで前倒しにしてもらわないとね」と言われました。

ＭＲＩの画像を説明していただいたところ、子宮が肥大しているのはもちろんですが、表面にボコボコとオデキ状の筋腫があり、子宮腔も潰れているとのことで大ショックです。先生にビクビクしていた上に、自分の状態はよっぽど悪いんだ！というショックで思わず涙が溢れてしまいました。

長年ひどい生理が当たり前になっていて、ヘモグロビン値は７前後、ちょっと動くと動悸と息切れがするような貧血状態でした。確かに体調の悪さは自覚していましたが、何となく自分で感じているだけなのと、確かな人から指摘されるのとは雲泥の違いがあります。相当なショックでした。

手術の予約は入れたものの手術日は未定。その日はドンヨリと落ち込んで家路に着きました。年内に手術できたらラッキーかなぁ･･･と漠然と考えながら。

９月に入って手術日が決まったと広尾ＭＣから連絡がありました。（この年の７月から、それまで週１回だった手術を２回にして、より多くの患者さんに対応できる体制を整えられたとのこと）考えていたより全然早くて１０月の手術。

検査のために手術２週間前に伺いました。その日はたまたま金曜日、土曜日に退院する方たちのお茶会の日でした。入院患者さんと診察・検診にいらした方たち総勢８～１０人くらいで楽しくおしゃべり、その中からも色々な情報を得ることができて、貴重な時間を過ごすことができました。（このとき出会って仲良くなった方とは、今でも仲良くお付き合いが続いています。）

初診や術前検査の人はちょっと暗く、入院中の方を含め手術が終わった人たちはとっても明るいくハツラツとした印象。月曜日に手術した人たちが、金曜日にはスタスタ歩いたり元気におしゃべりしたりしているのには驚きました。私が術前検査だと話すと、「１日目は痛いよ～」と脅かされたりしましたが、彼女たちはとっても元気そう。私もこうなれるのかしら？

お茶会には斎藤先生もいらっしゃいました。初診の時とは違って、にこやかに楽しくおしゃべりされています。あれ？最初とはえらい違うなぁと思いました。付いて来てくれた夫もお茶会に参加させてもらいましたが「話がナマナマしくてついて行けん。女の話や･･･」と、女ばかりの中で少々くたびれ気味。でも、男の人も知っていた方が良いことなので、ご主人のいらっしゃる方にはぜひご同行されることをお勧めします。

●慌しく始まった入院生活

１０月、いよいよ手術。夫と２人で横浜に前泊して手術に備えていたのに、当日朝、雨が降っていたので鶴見まで行かず横浜からタクシーに乗ったのがアンラッキーの始まりでした。

天候と時間帯のせいか道路は渋滞、その上運転手さんが道を知らず、散々迷い、広尾に着いたのは約束の８：００を３０分以上も過ぎた頃でした。私の手術は一番最初だと言うのに･･･！看護婦さんと挨拶を交わす間も無く、バタバタと自分の部屋に連れて行かれ、あれよあれよと言う間に手術の準備。「もう先生が見えてるから、早く早く！」と手術室へ猛ダッシュでフィニッシュ。心の準備も何もあったものではありません。

先だってのお茶会で知り合った方に「好きな音楽でも聴いて心を落ち着けて」とアドバイスをいただいていたのに、持参したＣＤを聴くヒマなんてありません。可哀相だったのは同行してくれた夫。私が手術室に入るまで、誰から声をかけられることも無く、ポツリと一人取り残されていました･･･。

いよいよ手術。斎藤先生が頭をなでてくれて、少し気持ちが落ち着きました。初めての開腹手術なので、もうドキドキ。麻酔がかかっているはずなのに頭は冴え冴え、まったく眠くならないので「どうしたら眠れるんだろう？」と焦っていました。手術のことは良く分かりませんが、まったく順調に進んだみたいです。

術直後、部屋に戻った私の顔色があまりに青くて夫がビックリしていました。元々貧血の上に手術のため前夜から絶食していたので仕方ありません。じぃっと寝ていると寝返りを打ちたくなってきました。なのに脚が思うように動かず、とっても辛い。どうしても脚を動かしたかったので夫に動かしてもらっていました。頭を動かすとクラクラして気分が悪い。麻酔がなかなか抜けていないのかな？体重を多めに言ってしまったせいかしら？と反省しつつ、気分が悪く一睡もできない夜を過ごしました。手術の夜は熱が上がったり下がったり。看護婦さんに色々とお世話をしていただいて、何とか乗り切ることができました。

長かった夜が明けて入院２日目。「歩いてくださいね～」と看護婦さんに言われたものの、傷の痛みでとてもまともに動けません。起き上がることすらままならず、部屋にある目の前のお手洗いが遠いこと･･･。私は血管が細いせいか点滴が漏れやすく、３本目の点滴ができなくなり注射に切り替わりました。朝晩の注射も痛くって、ちょっと注射が嫌いになりました。

手術で取れたモノが部屋に運ばれてきた時は「こんなモンがお腹にあったんや、ちょっとグロいなぁ」と思いましたが、「これで良くなるハズや」と安心感も強く感じました。

ちょっと辛かった入院生活を、夫が支えてくれました。夜中に仕事をして睡眠は往復の新幹線で。仕事の時間をやりくりし睡眠時間を削って、ほとんど毎日のように滋賀から通ってくれたのです。どれだけ心強かったか。夫は「２人でこの波乱の幕開けを乗り切ろう」と言ってくれたように、行動でもその心を私に示してくれました。

傷の痛みで動くのは辛かったのですが、食事は美味しくいただけたし、腸はぐるぐる音を立てて調子よく動いているし、夫の支えもあり、本人が辛いのとは裏腹に体調は日々ぐんぐん回復していきました。

退院前日の日曜日は、お茶会の代わりに斎藤先生とお出かけでした。私たちは帝国ホテルでランチをいただき、先生の講演を聴き、銀座でディナー。夜のドライブはうみほたる。さすがに秋の夜風は冷たく、冷えて傷が痛くなりましたが、とても水曜日に手術した人たちとは思えないくらい、楽しく元気に１日を過ごしました。夜にクリニックに戻ると看護婦さんが呆れていましたが･･･。

入院中に斎藤先生に抱いていた印象は180度変わりました。最初に怖いと思ったのが申し訳ないくらい。こんなに患者思いの優しい先生はそうそういらっしゃらないでしょう。

水曜手術組は月曜日の退院。月曜日は手術日なので皆さんが手術の準備で慌しい中、退院します。手術着で見送ってくれた先生の笑顔がとても印象的で、忘れられません。私は夫に迎えに来てもらいましたが、広島からいらしていた方は一人で元気に帰っていきました。

●すっかり回復して･･･

手術してからの生理は驚くべきものでした。出血量は減り塊も出なくなりました。交換するときのナプキンの重さが違います。手術前は“ヒタヒタ”という感じでズッシリ重たかったのが、今はそんな感じはありません。３日目からの出血は本当に少なく、ナプキンの表面にチョロっとの出血です。

私の住む滋賀は冬がとても寒い地方。手術が秋だったのですぐに冬になり、冷えると腰痛が出たり、生理中はお腹がキュ～っとする感じがしましたが、春になり暖かくなるとそれらの症状は改善していきました。生理の周期は２５～２８日で、多少バラつきはありますが、ほぼ安定しています。

今までは、生理になると体調は悪い上に精神的にも鬱状態になってしまっていた私。それを当り障りの無いように見守るしかなかった夫が、「これから元気になるだけやなぁ。できれば子供も欲しいなぁ」と、私の健康を心から喜んでくれています。

術後７ヶ月・２００２年の５月、検診にうかがいました。手術前、お腹の中で醜く肥大していた子宮はすっかり小さく普通の状態になり、子宮腔もクッキリ。可愛らしいチクワのようでした。先生も「子宮は正常になってるよ。これからは子供が楽しみだね」とおっしゃってくれて、すっかり安心。斎藤先生を始めスタッフの皆さんへの感謝の気持ちは、言葉では尽くしきれません。

今回の入院・手術を経て、夫の優しさ・強さを改めて知ることができました。健康を取り戻した今、私が筋腫になってしまったことは、私たち２人が人生の第一章を幸せに歩んで行くための「ステップ」だったのだと思えてならない今日この頃です。

Copyright(C)2002
HIROO MEDICAL CLINIC

レポートNo.89

「まさか本当に妊娠できるなんて！母になれたことの喜びと不思議」

石渡直美（３９才）

１９９６年 広尾メディカルクリニックにて子宮筋腫摘出手術。
２０００年 ご主人と出会い、結婚。
２００１年 ９月 長男たくみ君 誕生。

私は広尾メディカルクリニックで手術した後、まさか本当に妊娠して子供が授かるなんて、実は期待していませんでした。手術後に、斎藤先生は「大丈夫、子供も産めるよ」とおっしゃってくださいましたが、それは全摘を逃れて子宮を残せたので可能性はあるが、それが自分にも当てはまるとは限らない、と思っていたのです。今、優しい夫と日に日に大きくなっていく我が子に囲まれて、妻として母として本当に幸せな日々を送っています。

●筋腫を育てていた数年間

３０歳前後からだんだんと疲れやすくなり、仕事が休みの日は単にゴロゴロするだけではなく、足を高くして寝ていないと本当にだるくてどうしようもない日々が続きました。我ながら３０代前半とは思えない活気の無さに、どこか内臓がおかしいのでは？と思った事もありましたが、重篤な状態になっているわけでもなかったので、そのまま過ごしてきました。

２０代の半ばから時々不正出血があったので毎年１回は婦人科に行きましたが、ろくな検査もせず「排卵性のものでしょう」とか、「ホルモンバランスの不安定が原因の機能性出血でしょう」と言われ、そのまま何の対応もなく帰されました。当時の生理は、人と比べられないので何とも言えませんが、現在の健康な生理と比べると、生理不順で出血は多かったし、痛みも相当ありました。

３２歳になった秋、不正出血が止まらず腹痛も激しいので「これは完璧におかしい」と思い、総合病院の婦人科に行きました。この時の内診で「子宮が大きくなって卵巣も腫れているようだから、ＣＴを撮りましょう」と言われ、画像診断から子宮筋腫だと診断され、これ以上筋腫が大きくならないように、点鼻薬のホルモン療法を始めることになりました。

それで半年様子を見る予定でしたが、療法を始めてからムクミ、カユミなどの不調が現れ、ついにはある日のお風呂上りに「このまま死ぬのでは？」と思うほどの激しい動悸がしました。あまりの怖さに内科で診察を受けました。この時、内科の医師にホルモン療法の話をしたら、「心筋梗塞だったらとっくに死んでいる。ホルモン剤の副作用での狭心症だと思う」と言われました。

婦人科で副作用かもしれないと、話をしたら、「貧血でもないのに薬の副作用でそんなふうになる筈がない」と、冷たい対応をされ、患者の話をきちんと聞いてくれません。しかも女医さんだったので、同じ女性としてもう少しいたわりの気持ちがあってもいいのでは？と不信感を抱きました。

結局ホルモン療法は５ヶ月で中止、「独身ですし、様子を見ましょう」と言われたものの、それは「打つ手が無い」ということに他なりません。その間も腹痛などの不快な症状は続き、１～２年の間にお腹は妊娠６ヶ月くらいの大きさになっていきました。

●医師への不信が転じて広尾でスピード手術

様子を見るために通院していたある日、突然「手術できそうだから予約しますか？」と言われました。今までは「子宮の周囲は血管が多いので核摘出手術は危険、やるなら全摘が安全」と言われていたのに、この変わり様はどうしたことだろう？私は全摘したくない事を知っている筈なのにと不審に思いました。

手術を受けたはいいけれど病室で目覚めたら子宮が無かった、なんてことには絶対なりたくない、でもお腹を開けたら摘出しかなかったと、後から言われる可能性は考えられる。「手術できる＝子宮を残せる手術」なのか、信じられなかったので、この一言で不信感を募らせ、病院を変えてみようと思いました。

友人にこの話をしたら、「婦人科の治療は病院が変わるとすごく違うらしいから、１つの病院で決めてしまわないで、絶対セカンド・オピニンを聞くべき」とアドバイスしてくれました。「このつらい症状を何とかしたい」「そして子宮も絶対残したい」、そう思いつつ色々と書籍などで筋腫について調べていたある日立ち寄った図書館で、ふと婦人科のコーナーを覗いてみたら『子宮温存療法』という文字が目に飛び込んできました。それは斎藤先生の本でした。先生の本の体験談を読み、心の底から希望が湧いてきたのを今でも覚えています。

さっそく広尾ＭＣに診察に行き、たまたまキャンセルが出た８月の末に手術を予約し、先生から渡された色々な資料で「私よりもひどい状態の人が治っているのだから」と、母を説得し、初診から１ヶ月余りで手術を受けました。

なぜこんなに急いだかというと、もちろん一刻も早く不調を何とかしたいという気持ちもありましたが、斎藤先生の「絶対大丈夫！」という力強い一言があったからだと思います。絶対子宮を残してくれると信じられる先生でなければ、手術を受けたくなかった私に、斎藤先生の一言は、充分な信頼感を与えてくれました。

術後の回復は順調そのもので、退院後の生理の軽さと健康な日々に心から喜びを感じました。「子供も大丈夫」と言われていましたが、この時は「自分にも可能性が残されたってことだなぁ」というくらいにしか感じていませんでした。とにかく健康な体が嬉しく、今までとは違い、元気に明るく日々を過ごせるようになりました。

●結婚、そして長男を授かり幸せな日々

その後、友人からの紹介で夫と知り合い、皆に祝福されて結婚しました。斎藤先生の手術を受けずに夫と出会っていてもお付き合いをする気にならなかっただろうと思います。斎藤先生も「女性としての健康に自信が持てないと、どうしても男性を避け気味になる」とおっしゃっていました。広尾ＭＣで手術したら男運が良くなるという話は、あながちウソではないみたいです。

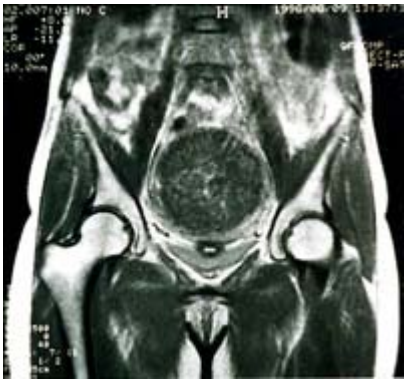
２０００年に結婚した当時、周囲の友人達は「子供を育てるだけが夫婦じゃないけれど早く子供ができるといいね！」と、私がプレッシャーに感じないように励ましてくれましたが、結婚してすぐに妊娠できたことには、私が一番驚きました。

自然分娩をしてみたかったのですが、手術歴のある子宮は何もしていない子宮より母子ともに危険になる可能性が高いそうで、リスクを押してまで自然分娩に拘っていたわけではないし、無事に生まれてくれれば帝王切開でも構いませんでした。

お産の担当医師に、筋腫の手術を受けた事を報告するために斎藤先生からのファイルを見せると、とても熱心に見ていましたが、「このくらいの手術は普通の病院でもできる」と負け惜しみにも聞こえるコメント。でもその後に、取れた筋腫も、広尾ＭＣの設備も、私の選択も全てを含めて「すごいですねぇ」と言っていたので、心の中では感服していたに違いありません。

女性にとって、子供を産むだけが人生ではありませんが、『**産む**人生』と『**産まない**人生』を選べるということは、とても幸せ、かつ重要な事です。子宮を全摘してしまったら『**産めない**人生』を歩むしかないのですから。

私の身体の一部でありながら、その中で別の人格が育っていたという不思議さを存分に感じ、母となる喜びを感じる事ができて、本当に幸せです。母として子育てをしてみたいと思っていた事が実現して、とても嬉しく思います。そしてその幸せや喜びは現在進行形なのです。

術前(pre-ope)のＭＲＩ	
	

摘出物

	術 前 (pre ope)	術 後(post ope)
赤血球(RBC)	364	-
血色素 (Hb)(g/dl)	11.9	-
ヘマトクリット(Ht)	34.4	-
CA-125	27	-
備考	不正出血 倦怠感 下腹部痛 摘出物：510ｇ	

Copyright(C)2002
HIROO MEDICAL CLINIC

レポートNo.90

「医療は患者が選ぶ時代。賢く選んで悔いの無い治療を受けましょう」

大河原美穂（３５才）

●病院や医師を選ぶということ

学校で「女性のからだは女性が守らねばならない」という講義を聴いたとき、ふと斎藤先生がおっしゃった「人間の体に不要な臓器など無い」という言葉を思い出しました。確かに虫歯は悪いところだけ削るのに、なぜ子宮はそれができないのか？なぜその技術が進まないのか？「産めば必要ない臓器」という男の論理で子宮を考えていないか？などなど、考えさせられることが数多くあります。

私は自分なりに、医療や病院は選んできたつもりです。不妊治療や子宮の治療、お産に関わる病院は、それぞれ数件尋ねた上で納得できる病院を選びました。医師や病院を選ぶ基準には「患者の訴えにきちんと耳を傾けてくれ、納得のいく治療法を提示してくれる」ことが最低限必要ではないかと思うのです。

保険医療制度で、日本中どこでも同じレベルの医療が低価格で受けられますが、「保健医療＝最善の医療」ではない場合もあるということ、自由診療で患者が望む治療が受けられる時代が来ているのだということを感じずにはいられません。

●不妊治療に感じた疑問

'９７年に結婚して、子供が欲しくなってもなかなかできなかった私は、不妊治療を受けました。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、不妊治療は大変なものです。ホルモン剤で排卵のコントロールをして、医師から排卵日を予測されて・・。もちろん私だけでなく夫の協力も大切です。

私は２０代の前半、社会人になってから生理痛があるようになり、この当時から婦人科検診で筋腫があると言われていました。ただ、急激に成長するようなタイプではなかったようなので、「様子を見ましょう」と定期的な検査だけで、特に治療らしい治療はしていませんでした。

不妊治療を始めてしばらく経ち、「子宮筋腫があるから妊娠できないのでは？」という考えが頭に浮かびました。医師にその話をしてみましたが、あまり真剣に耳を傾けてくれる様子がない上に「筋腫なんて誰でもある」という答え。子宮が健康でないといけないのでは？という私の問いかけに対する答えになっていない上に、「不妊治療はもう体外受精しか方法がない」と言われてしまいました。

この医師から見たら、私が抱いた疑問は些細な事だったかもしれないし、現在の先端技術を駆使すれば妊娠することは容易かったのかもしれません。しかし私にとっては、この疑問はとても重要なことでした。その気持ちや意味をきちんと汲み取っていただけないなら、私とこの先生はちょっと合わないかもしれない・・と感じ、この病院に行くのは止めました。

筋腫があるまま妊娠することに漠然とした不自然さを感じた私は、別の病院でも「筋腫があるから妊娠できないのでは？ちゃんと筋腫を治したほうがいいのでは？」と尋ねてみたところ、私の話もきちんと聞いてもらえて、筋腫の検査もしてくれた上で、「筋腫は無い方が妊娠するかもしれませんね」との返事でした。そこは不妊治療専門で筋腫の治療はできなかったので、筋腫を治療(手術)するための病院を紹介してくれました。

●明後日手術？

さっそく紹介された病院に行ってみると、初診のその日に「筋腫は明後日オペしましょう」と簡単に言われて、すごく驚きました。更に「麻酔の先生やその他いろいろな手配があるから、今ここで決めて欲しい」と言われたのですが、子宮を手術することを私一人で決めてしまうことはできないし、即決できるようなことではないし、とにかくその場は丁重にお断りして帰りました。

その後、筋腫について調べていくと、子宮の周囲は血管が多いため子宮を残す手術は難しく、医師の腕の良し悪しに大きく左右されるということが分かりました。それなら尚更、安直に手術する病院や医師は決められない、私の子宮は腕のいい先生に手術してもらわなくては・・。

数件の婦人科を訪れて、妊娠と筋腫の治療について伺ってみました。とてもいい先生もいらしたのですが、私の求める医療とはズレがあり、「この病院で治療しよう」と決心できる病院はありませんでした。

程なく広尾メディカルクリニックのホームページも見つけ、子宮を残す手術をしていることを知りました。「自由診療ということは、この先生は相当自信があるに違いない」と直感。初診で怪しい印象を受けたら、次から行かなければいいだけのこと。すぐに「行って話だけでも聞いてみよう」と決めました。

初めてお会いした斎藤先生は、お医者様らしくなくちょっと怖い印象でしたが、先生の言葉は自信に溢れ、嘘がありません。この先生なら私の子宮を任せても大丈夫だと確信し、'９９年１２月に手術を受けました。筋腫だけだと思っていた私のお腹からは、筋腫、腺筋症、チョコレート嚢腫などが摘出され、お腹の中に少し癒着があったようでした。

●健康になって充実した日々、そして突然の妊娠

その後の回復は目覚ましく、あれほど辛かった生理痛がすっかり軽くなり、座っていられないほどの腰痛も嘘のように無くなりました。健康な生理になってからというもの、生理の時も普段とまったく同じように生活できるので、激しい痛みを伴っていた頃のように生理を意識することも無くなっていきました。

このようにすっかり元気になった私は、妊娠のことはしばらく考えないことにして、'００年４月から大学院生として女性学や家族社会学などを学び始めました。勉強を始めたら一気に多忙になり、'０１年３月には半月ほどＮ．Ｙで徹夜でレポートを書いていたり、とにかく目が回るような、忙しく充実した日々を過ごしました。

忘れもしない'０１年４月１８日、「雅子様御懐妊」のニュースを聞いたとき、「そう言えば少し遅れているかしら？」と思い、市販の妊娠試験薬で調べたら、なんと陽性！そう言えば少し熱っぽかったけど、疲労のためだと思っていたので、妊娠なんて考えてもいませんでした。

驚きはすぐ嬉しさに変わり、子供を欲しがっていた夫も大喜びでした。あんなに子供を望んで不妊治療までしていた頃は妊娠できなかったのに、自分の健康を取り戻し、妊娠なんて考える間もないほど忙しい充実した日々を送っていたら妊娠するなんて、本当に神様というか運命の“意思”のようなものを感じました。

その後は、雅子様の報道を見るにつけ、「この子も雅子様の赤ちゃんと同じようにスクスクと育っている」と喜びもひとしお。妊娠することができた幸せを体のすみずみまで感じることができました。帝王切開で無事産まれた娘は、元気に７ヶ月目を迎えました。母子ともに健康で、夫も娘をとても可愛がっています。娘の誕生は、あまり妻らしくない私が夫にしてあげられた最大のプレゼントかもしれません。

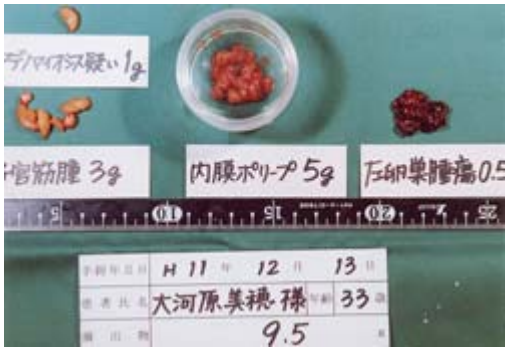
そして母になってみて、改めて不妊治療の大切さを感じました。私はハイテクな不妊治療を何となく不自然に感じてその治療を受けることはありませんでしたが、健康な状態でもどうしても子宝を授かることができないご夫婦もいることを考えると、不妊治療は必要なのです。医師に言われるままではなく、治療を受けるご夫婦が、数多くある不妊治療からどのような治療を受けるかを考えて、選んで決めるということが大切だと思うのです。

●変化していくと思われる日本の医療

広尾メディカルクリニックを選んだ患者さんの多くは、保健医療よりも広尾メディカルの自由診療を自らの意思で選んだ人たちです。これから日本の医療は、欧米のように患者が自分の受けたい医療を選べる時代になっていくと思います。

医療を提供する側に技術や実績が無ければ、高度で多様な医療を提供することはできませんし、医療を受ける患者側にもそれ相当の費用負担が発生します。命や健康をお金で買うというと語弊があるかもしれませんが、高額な費用を払ってでも高度な治療を受けたい、健康を取り戻したいという人は確実に増えるはずです。

そのとき医療がどのように患者に応えていくのかが、日本の医療の大きな課題と言えるでしょう。このホームページに訪れて体験談をごらんの方々も、納得のいく医師や病院、治療法を賢く選んでいただきたいと思います。

摘出物


	術 前 (pre ope)	術 後(post ope)
赤血球(RBC)	454	-
血色素 (Hb)(g/dl)	14	-
ヘマトクリット(Ht)	40.3	-
CA-125	49	-
備考	●生理痛 ●摘出物：腺筋症 1g 子宮筋腫 3g 内膜ポリープ 5g 左卵巣腫瘍 0.5g	

Copyright(C)2002
HIROO MEDICAL CLINIC